

TERRA RENAISSANCE

20th Anniversary magazine



ビジョン・ミッション・活動理念	04
平和のために歩み続けた20年間	06
特別企画	08
国際協力のあり方と未来へ地球市民として（業界対談）	08
支援プロジェクトのプロセスとスタッフの連携	12
アジア	16
アジア事業の変遷	16
アジアにおける自立と自治（受益者インタビュー）	20
その土地、その人に合う支援のありかた（江角インタビュー）	22
アフリカ	24
アフリカ事業の変遷	24
アフリカにおける自立と自治（受益者インタビュー）	30
それぞれが持つ力を信じ続けた20年間（小川インタビュー）	32
テラ・ルネッサンス 20年の成果総覧	34
大槌刺し子	38
大槌刺し子事業の変遷	38
刺し子の原点に還り、前進する「大槌刺し子」	40
大槌刺し子の商品ができるまで	42
啓発	44
啓発事業の変遷	44
平和教育・講演活動 いま、平和の種を蒔く	46
社会を変える暮らしの選択	48
支援者座談会	50
元子ども兵がみつけた、生きがいのある暮らし。	54
テラ・ルネッサンスを応援してくださる皆さん（有識者の方々）	58
新設「政策提言推進室」平和のための仕組みをつくる	60
新設「ブランディングデザイン室」平和のための世界観を描く	61
資料集	62
テラルネ用語集	62
完了したプロジェクト	64
主なメディア掲載・表彰・書籍	66
私にとってのテラ・ルネッサンス	70
創設者・鬼丸昌也からのメッセージ	72

テラはラテン語で「地球」、
ルネッサンスは英語で「再生、復興」という意味を持つ。
テラ・ルネッサンスとは「地球の復興」を意味している。

団体創設から20年、

私たちは「すべての生命が安心して生活できる社会
(『世界平和』)の実現」を目指し活動してきた。

それは、一人ひとりの中にある「未来をつくる力」を信じ、
ここに働きかけてきた時間だったといえる。

未来をつくる力の結集は、やがて大きな渦を描き、
この世界にまたひとつの変化を現してくれる。

私たちの地球が、ここに浮かび上がってくる。

VISION

すべての生命が安心して生活できる社会(=世界平和)の実現

MISSION

当会の事業を通じ、人々に『次世代に対する責任』を啓発し、
それぞれが個人、家庭人、社会人、そして地球市民として、
未来の子どもたちの生活をも視野に入れた生活(簡素な生活)を
実践することにより、人類共通の理想『世界平和』を実現する。

PHILOSOPHY

- 1 私たちは一人ひとりに「未来をつくる力」があると信じ、
市民の可能性を追求しています。
- 2 私たちは内なる変化がすべての変化の始まりであり、
変革の主体者は私自身であることを理解しています。
そして、他人も変革の主体者であることを理解し、
相手を尊敬しています。
- 3 私たちはあらゆることは常に変化することを理解し、
あきらめずに活動し続けています。

平和のために歩み続けた20年間

- 創設者の鬼丸昌也が、講演活動を始める
- カンボジアで地雷撤去支援事業を開始

2001

- テラ・ルネッサンス(任意団体)の設立

'03

- NPO法人格を取得
- ウガンダにて、カンパラ市に事務所を開設(2008年に閉鎖)
- ウガンダにて、元子ども兵社会復帰支援事業を開始

'05

- カンボジアにて、バタンバン市に事務所を開設

'06



テラ・ルネッサンスの設立

- コンゴ(民)にて、子ども兵の現地調査を実施
- および現地NGOと連携し、元子ども兵社会復帰支援を開始

'07

- ラオスにて、不発弾処理支援および中学校建設支援事業を実施

'08

- ウガンダの元子ども兵社会復帰支援事業で38名(1・2期生)が卒業
- コンゴ(民)にて、中央カサイ州に事務所を開設

'09

- 創設10周年イベントを開催
- クラスタ―爆弾禁止条約第1回締結会議(ラオス・ビエンチャン)へ参加

'10

- テラ・カフェ(定期活動報告会)開始
- インターンを受け入れ人数が、50名を突破
- 理事長に小川真吾が就任
- 「大槌復興刺し子プロジェクト」運営開始

'11

- 武器貿易条約国連会議(ニューヨーク)へ参加
- 独立行政法人国際交流基金「地球市民賞」受賞

'12



大槌復興刺し子プロジェクト
(Photo by Iwashita)

- テラ・スタイル東京(定期活動報告会)開始
- 後援会組織「テラ・ルネッサンス千葉」設立
- ブルンジにて、ブジュンブラ市に事務所を開設

'13

- ブルンジにて、元子ども兵および紛争被害者自立支援センター住民参加型建設プロジェクトを開始

- 認定NPO法人となる

'14

- インターンを受け入れ人数が、100名を突破
- 公益財団法人社会貢献支援財団「社会貢献者賞」受賞

'15

- 創設15周年を迎え、周年事業を実施(イベント、記念誌ほか)

'16

- ウガンダにて、南スーダン難民支援事業を開始
- 後援会組織「テラ・ルネッサンスサポーターズクラブ東海」設立

'17

- 日本にて、佐賀事務所を開設
- 九州県内における啓発活動およびふるさと納税(寄附)の受付を開始

'18

- 国連特別諮問資格を取得
- ラオスにて、シエンクアン県に事務所を開設

'19

- 九州北部豪雨への支援としてチャリティー講演会を開催
- 武器貿易条約(ATI)締約国会議(CSD)に「Terra Renaissance Sponsorship Program」を設立。
- 新型コロナウイルス感染症対策における支援活動を各事業地で開始
- JICANGO等提案型プログラム「京都SDGsラボ」の運営を開始

'20

- 第4回ジャパンSDGsアワード副本部長(外務大臣)賞受賞
- 啓発事業において、認定NPO法人DXPと業務提携のうえ日本国内における若者への支援活動を実施
- 後援会組織「テラ・ルネッサンスサポーターズクラブ東京」設立
- インターンを受け入れ人数が、150名を突破
- 海外におけるファンドレイジング活動を本格開始(主に台湾、英語圏)

'21

- 創設20周年を迎え、周年事業を実施(イベント、記念誌、チャリティーオークションほか)
- 佐賀事業において、東明館学園との包括連携協定の締結
- 組織体制として「政策提言推進室」「ブランディングデザイン室」を新設
- 「大槌復興刺し子プロジェクト」を「大槌刺し子」として事業再編

'21



新型コロナウイルス支援活動



佐賀県に事務所を開設



コンゴにて子ども兵の現地調査



地雷撤去を行う関連団体に資金支援

(鬼丸)確かに、支援の当事者である彼らは今、対等どころか、私たちをアツプデートさせ、たくさんものを与えてくれる存在になっていますね。岩附さんは、この時代の国際協力について、どう思われますか？

NPO/NGOは、政府や企業と連携して問題解決を目指す時代

(岩附)児童労働が世界的に増える中で、NPOだけで問題解決を目指す今までのやり方では、限界があると感じています。そこで、コレクティブインパクト(行政や各種団体、企業、市民などが協力し



photo by ACE

(鬼丸)なるほど。先進国が一方的に援助をする段階はすでに終わっていること、私たちも活動の中で感じています。(本木)はい。私はこの10年近くインド人と仕事することが多かったのですが、彼らからたくさんことを学びました。ただし、過去によく言われてきた「支援するつもりで、こちらが助けられた」といった精神的な文脈ではありません。マネジメントのやり方や政府の巻き込み方、組織のあり方、人権意識などを、彼らからみっちり教わりました。そんな優れたリーダーたちとどんな事業展開ができるのかを考えているところです。

て社会課題を解決するアプローチ的な動きを重視していきたいと思っています。そのひとつが、ガーナ政府やJICAと連携して取り組んでいる児童労働フリーゾーンという仕組みです。地域や行政機能を活かして自律的に児童労働への解決が進むシステムづくりを目指し、現在パイロット活動を行っています。企業も含め様々なステークホルダーが関心を持ってってくれているので、NPOとしてそうした人たちともつなげていく役割があると感じています。

(鬼丸)私たちNPO/NGOの目的として、取り組む課題を解決し、対象者が苦しみや悲しみを乗り越えて幸福な人生を歩む姿をサポートすることがある

(鬼丸)よくわかります。私たちには常に、当事者である声なき人たちに、どれだけ寄り添えるかが問われています。しかし、問題を構造的に解決しようとした時には、また別の視点も持ち合わせる必要があるのかもしれません。それは、取り組みや課題に関係する人それぞれの

(本木)少し観念的な言い方になるのですが、一人ひとりを大事にすることではないかと思っています。支援の対象者はもちろんですが、それだけでなく、連携していく行政や企業、他団体の人たちも含めてです。皆それぞれに組織としてのスタンスがあり、悩みや葛藤がある。個別レベルでは、各人が尊重されるべきですが、それらが組み合わさると、歪みが生じることもあるのが現実です。難しい問題ですが、全体として見た時にどんな答えを出せばベストなのか。そこを悩み続けるのが、私たちNPO/NGOとして大切なことではないでしょうか。

主観に思いを馳せる視点です。各人の考えや正義が複雑に絡み合っただけです。害に対しては断固として声を上げていく必要がありますが、立場の違う人の視点をそれぞれ意識しながら活動できたら、可能性が広がるような気がします。さらに言えば、既存のシステムに取り込まれない強さやしなやかさも持てればと思います。システムを変えるためには、その中に入っていくことも大事ですが、それだけでは不十分なんです。そこから一回抜け出して俯瞰できる力が、我々NPO/NGOには必要なのだと、お二人のお話を伺って感じました。



photo by 伊藤圭



本木恵介

認定NPO法人かものほしプロジェクト 共同創業者・理事長

大学2年生の時に共同創業者の村田と出会い、2002年にかものほしプロジェクト設立。2006年からカンボジアにて、2010年からはインド事業の戦略立案・企画・実施を通じ、世界の「子どもが売られる問題」をなくすために日々活動を行っている。NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)理事長。NPO法人SALASUSU理事。NPO法人新公益連盟幹事。システムコーチ。2児の父。

鬼丸昌也

認定NPO法人テラ・ルネッサンス 創設者・理事

高校在学中にアリアラトネ博士(サルボダヤ運動創始者/スリランカ)と出会い、『すべての人に未来をつくりだす能力がある』と教えられる。2001年、初めてカンボジアを訪れ、地雷被害の現状を知り、『すべての活動はまず『伝える』ことから』と講演活動を始める。大学在学中に『すべての生命が安心して生活できる社会の実現』をめざすテラ・ルネッサンス設立。地雷、子ども兵や平和問題を伝える講演活動は、遠い国の話を身近に感じさせ、ひとり一人に未来をつくる力があると訴えかける講演に共感が広がっている。3児の父。

岩附由香

NPO法人ACE代表

大学院生だった1997年にカイヤシュ・サティアルティ氏(2014年ノーベル平和賞受賞)が呼びかけた「児童労働に反対するグローバルマーチ」を日本で開催するためACEを発足させ、以後代表を務める。現在「広げよう!子どもの権利条約」キャンペーン事務局として子ども基本法のアドボカシーを行う。2019年大阪G20サミット開催にあわせて世界の市民社会組織で構成されたC20(Civil 20)では議長を務めた。国際協力NGOセンター副理事長。モットーはDream, Discover, Believe, Do。2児の母。

特別企画・業界対談

国際協力のあり方と未来 ～地球市民として～

国際協力業界を牽引する2つの団体から本木氏・岩附氏をゲストに迎え、特別対談を実施。外部からみたテラ・ルネッサンスの魅力とともに、国際協力の未来についてを探究しました。

(鬼丸)今日は20周年を記念して、ACEの岩附さんと、かものほしプロジェクトの本木さんをお招きし、国際協力の現状と今後についてお話ししていきたいと思っています。まずは自己紹介からお願いします。

(岩附)ACEは、世界の児童労働問題に取り組みするために、1997年に学生5人で立ち上げた団体です。今世界では1億6千万人の子どもが児童労働に従事していると言われていますが、私たちは、主にインドやガーナで支援活動を行いながら、国内の啓発事業、政府や企業への提言活動などに取り組んでいます。

(本木)かものほしプロジェクトは、2002年、子どもが売られない社会を目指し、学生3人でスタートしました。当初はカンボジアで事業を始めましたが、状況の改善が見られたため現地で自立してもらい、現在は、インドを中心に活動しています。その他に、自治体や企業と連携しながら、問題解決のしくみ作りにもトライしているところです。

(鬼丸)テラルネの設立が2001年なので、ちょうどそれぞれ20年前後、同じ国際協力の現場で活動してきたことになりですね。いつも両団体の活動には勇気づけられてきました。この20年で世界の状況も地球環境も大きく変わりましたが、お二人は、NPOやNGOを取り巻く現状

をどのように捉えていらっしゃいますか？

(本木)以前は、アジアやアフリカの途上国と日本などの先進国には大きな格差があり、先進国が途上国を支援するという構造でした。今もその側面はもちろんあるのですが、途上国の経済が発達し、逆に、日本は苦しい状況にあります。その中で、我々ができる国際協力とは何か。それを問う必要があると思っています。私なりの答えを言うなら、国や民族を超えてともに助け合える社会を作ることが、今後の国際協力なのではと考えています。その時に、国益や企業の利益を超えて、自由な発想で対話ができる「市民」という立場が非常に重要になってくるかと思っています。





photo by Siddhartha Hajra

「市民性」と「革新性」で、さらなる社会変化を

(岩附)同感です。これまで活動する中で、私たちには、既存のシステムを変える役割を果たせる力があると感じてきました。たとえば、こんな事例がありました。現地のコミュニティでプロジェクトを進めるには、村長さんの許可が必要なのです。本来は、女性や子どもの発言権も強めたいのに、私たちが入ることで古い構造を強化することにもなり得る。そこにジレンマを感じ、状況を変えたいとずっと思っていました。ところが最近、支援を続けてきたコミュニティで、女性や子どもが元気になり、村長に対して自分たちの希望を伝えるというケースが

増えたのです。これは嬉しい変化です。よく、地域おこしで変化を生むのは、「よそ者・馬鹿者・若者」だと言われますよね。私たちも、そんな変化を起こす存在になっているのかなと思った出来事でした。

(鬼丸)素晴らしい変化が起きていますね。希望を感じます。

(岩附)以前、鬼丸さんが、社会変化を起こす組織に必要なのは「市民性」と「革新性」だと話していて、とても印象に残っています。この2つの言葉を踏まえて、今後は鬼丸さんご自身がどのように未来を見据え、何を軸に活動を展開していきたいと考えているのかを、ぜひ伺いたいです。

(鬼丸)この言葉は、龍谷大学の深尾昌峰先生から教えて頂きました。まず、市民性について言えば、テラルネとしては、できるだけ市民が日常で参画できる取り組みを増やしていきたいです。具体的には、テラ・ルネサンス共済やテラ・ルネサンス電気のように、普段支払うお金の一部が社会貢献につながるしくみ作りを強化したいと思っています。また、学校講演にも力を入れ、皆さんとの接点を作っていきたいです。革新性ということでは、「面白い・楽しい・新しい」の3要素を意識して事業展開し、多くの人を巻き込みたいですね。今後チャレン

かもしれない。そんな状況の中で、NPO/NGOの役割としては、利害関係のない人たちをつなげて支え合う関係を作ることが大切になってくるでしょう。そもそも、IT技術やテクノロジーの暴走を防ぐために、国際的な取り組みがなされるよう働きかけたり、国際緊張の緩和を促したりすることも重要です。エキサイティングな時代になると思う一方で、私たちの役目もより一層大切になってくると考えています。

(岩附)国境を超えて活動する中では、支援対象者や事業に関わる人々の力を通して、私たちが、自分自身の力に気づかされるのが多々あります。実は、個人レベルではなく、日本という国にも力があり、役割があるのです。海外の人と交流していると、「日本には、こんな期待が持たれているんだ」「日本はこんな目で見られているんだ」と彼らから教えられることがよくあります。日本だからこそこできることがあるのに、政府や行政はそこに気づけない。また日本は、児童労働や強制労働で作られた製品をアメリカの次に多く消費しているにも関わらず、議論がなかなか進まない。そんな状況を変え、個人でも国レベルでも、自分自身の可能性に気づき、社会を変えるために自らの力を発揮できるように、働きかけていければと思っています。

(鬼丸)お二人の話聞いて、「グローバ

ジしたいのは、仮想通貨、ブロックチェーンの活用です。ウガンダ難民のベシックインカム実現を目指して実証実験できないかと模索中です。ACEさんと協力して、コンゴで児童労働フリーゾーンを誕生させることも考えています。よろしくお願ひします。

(岩附)こちらこそ！市民性って本当に大事だと感じています。私たちが取り組む児童労働や地雷、子ども兵などの問題は、日本で生活していると少し距離感がありますよね。しかし、身近な方法で貢献できるとわかれば、課題を自分ごととして捉えるきっかけになると思います。



photo by Siddhartha Hajra



photo by Natsuki Yasuda Dialogue for People

ル」と「インターナショナル」という2つの言葉について、思いを巡らせました。

私の独自の解釈なのですが、これからはグローバルな時代から、インターナショナルな時代になると考えています。前者が、ひとつの考え方や制度で世界を染め上げ、同じルールで優劣を決める時代。後者は、多様な社会や様々な価値観がボーダレスに共存する時代。前者から後者へ移行する道筋はまだ険しく、今、世界全体で、自国中心主義が高まっています。また、他国ではなく自国の課題解決にリソースを投資しなければならぬ状況もあります。その状況で、我々が国際支援を続けていく意味があるのか。この点について、ある人に相談したんです。すると「だからこそ、意味があるのだ」という答えが返ってきました。政治レベルで他国との連携が取りにくい時期

変化の時代だからこそ、NPO/NGOが果たす役割は大きい

(鬼丸)そろそろ対談も終わりに近づいてきました。今後の国際協力の可能性や未来について、お二人はどうお考えですか？

(本木)IT業界や宇宙開発、遺伝子研究などの分野で様々なイノベーションが生まれ、国境を超えて、今、既存の秩序が大きく変わりつつあります。今後は百花繚乱でありながら、弱肉強食の時代になる可能性もあると捉えています。力があって楽しく生きられる人たちにとってはいいかもしれないけれど、そうでない人たちにとっては、つらい時代になる

だからこそ、国境を越えて、市民が民間ベースで助け合い交流することがますます重要になるのだ、と。その言葉を聞いて、市民に立脚して革新的な手法で活動するNPO/NGOの存在は、ますます大きくなると思っています。さらに、外だけを見るのではなく、私たちが把握している海外の状況を、日本の政府や経済界、そして、市民に伝えていく視点も必要です。今、大きな変化の時代が訪れています。今、お二人との対話を通して、我々NPO/NGOはともに協力しながら、強さや情熱を持ち続け、国内外に良い影響を發揮できる存在であり続けたいと、改めて確認できました。ありがとうございました。



支援プロジェクトのプロセスとスタッフの連携

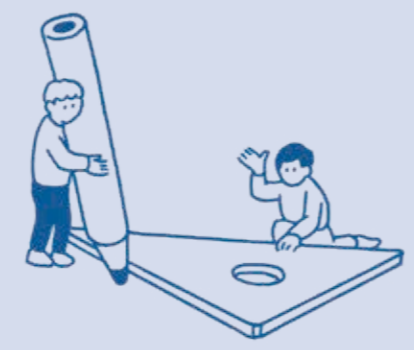
支援プロジェクトのプロセスを、6つの段階にわけて解説。ところどころで“テラ・ルネッサンスらしさ”が垣間見える内容です。国内の連携とあわせてご紹介します。



6

報告

ACTION
御礼と報告でよりよい関係を築く
 寄付という形で思いを託していただいた方々へ、様々な報告をもって御礼をお伝えします。年に一度の総会をはじめ、年次報告書やブログでの活動レポート、お礼状や寄付金の領収証発行など、その方法は様々です。細やかに丁寧な報告によって、ご支援いただく皆さまとのよりよい関係を築いていきたいと願っています。



4

実施

ACTION
ゴールを見失わず、柔軟に修正をする
 実施していく上で、最も重要なことは「計画に縛られ過ぎず」ゴールを常に意識するという事です。現場では“想定外”が常に発生しうることを想定しなければいけません。事業立案で描いた道筋(計画)が閉ざされた時に、いかにクリエイティブに別の道筋を描き、ゴールへ導くかが実施者の役割です。支援を受ける方々とともによりよい形を模索し、敏速で柔軟な軌道修正を行いながら目標達成を目指します。

5

評価と改善

ACTION
長期的・総合的な視点で支援の効果を見つめる
 事業の実施前後の変化を可能な限り量的、質的に評価していきます。また、中長期的に対象者に与えているインパクトを評価することも大切です。特に、一人ひとりのウェルビーイングは客観的な経済指標のみで測れるものではないので、総合的かつ長期的な視点で評価と改善を行うことを心がけています。



2

事業立案

ACTION
ゴールまでの道筋を描く
 対象者にとって適切な支援のゴールを設定します。そして、これを達成するための道筋(段取り)を描き、必要な人や資金、時間などを見積もり、具体的かつ実現可能な事業計画へと練り上げていきます。同時にゴールの達成を阻害する外部要因や、この事業で「達成できないこと」を把握しておくことも重要です。それにより、他の援助機関やセクターの役割を認識し、お互いが連携し、更なる上位ゴールに近づくことができます。

3

資金調達

ACTION
仲間をあつめる
 『事業立案』で明らかになったように、計画した支援を実施するためには活動資金の調達が必要です。テラ・ルネッサンスの場合、公的機関からの助成金なども活用する一方、個人や企業の皆さまへ寄付のご協力を呼びかけることを大切にしています。その理由は、ひとりでも多くの方に寄付という形で事業に関わっていただき、ともに社会課題を解決していくパートナーとしての仲間を増やしていきたいと考えているためです。

1

調査

ACTION
ないものを探し、あるものを探す
 テラ・ルネの支援活動は「ないもの探し」からはじまります。食料がない、職がないなど、支援を必要としている方々と対話を重ねながら、何が本質的に求められているのかを丁寧に観察することが大切です。さらに、このうえで「あるもの探し」を行います。地元の人々の伝統的な知恵や知識、技術、自然資源、文化的な価値に至るまで、対象地域や対象者一人ひとりに内在するものを活かして何ができるのかを考えます。

PROJECT FLOW



隅田千恵一 管理部長

当たり前の状況を、当たり前と感じられるように

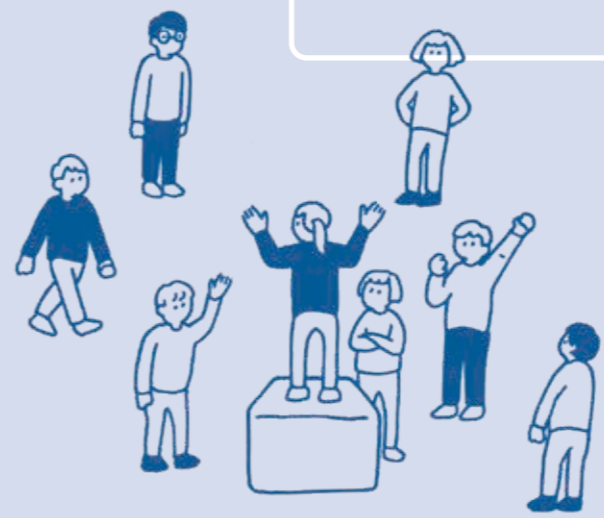
年に一度の決算をはじめ、定期総会の開催や日々の資金繰り、海外への活動資金の送金や各種保険の手続きなど。これらは、国内において管理部が担っている業務の一部です。私たちの役割は、最適な環境をいかに作れるかということ。安全かつ円滑に進められるように、既存のルールの中で、またときに新たなルールを作りながら、どのように事業を実現できるかについて考え、実行します。このため、管理部が担う役割は企業であってもテラ・ルネッサンスであっても変わりません。そのうえで感じるのは、テラ・ルネッサンスが取り組む事業と挑戦は、新しい可能性に満ちているということ。現場で事業に励む人たちの味方でありたいと願っています。



小田起世一 啓発事業部長

啓発に立脚したファンドレイジングの実践

活動のために必要な資金を調達することは、ファンドレイジングにおける最重要課題です。一方、資金さえ集められるとよいかといえば、テラ・ルネッサンスの場合は少し違っています。なぜなら、ファンドレイジングとは社会課題をともに解決するための「仲間集め」だと思っているからです。では、なぜ仲間を集めたいかといえば、資金調達を叶えるためだけでなく、寄付を通じて一人ひとりに関心を持ってもらい、その意思をもって「社会を変えるための運動」にしたいと考えているからです。ファンドレイジングの本質とは、市民が持つ「社会課題をなんとかしたいという気持ちに答えるコミュニケーション」だといえます。





ひとり一人に未来をつくる力がある

アジア事業

Historical Changes of Asia Projects

の変遷

2001



鬼丸がカンボジアを初めて視察した。

2002



カンボジア視察

ボル・ポト時代の強制収容所として使われたトゥール・スレン博物館、キリング・フィールド、ゴミの山、地雷撤去作業、地雷被害者などを治療する病院や、義肢装具を提供するリハビリテーションセンターなどを視察するとともに、集めた資金を各団体へ提供。

2003



訪問した孤児院(写真左)や難民を助ける会が運営する車椅子工房(写真下)、義肢装具士養成学校や、地雷被害者らを治療する病院などを視察し、集めた資金を提供。



地雷撤去団体の地雷撤去現場を視察したときの様子。日本語ガイドのヴァーサラさんは、熱心にガイドしてくれたが、2007年に病気で亡くなった。



クン・チャイ

カンボジア事務所 プロジェクト・コーディネーター

皆さま、こんにちは。私たちの活動は、地雷被害者などの障害者や脆弱な世帯の生活を向上させるとともに、基礎教育を脆弱な世帯の子ども達へ提供することです。人々を勇気づけ、貧困を削減し、世界の平和をつくる人材を育成することを目指しています。私たちの使命を実現するために、皆さまの心、想い、活動と資源を、常に共有して下さることに感謝申し上げます。

staff comment

2005



バタンバン州バヴェル郡に住む除隊兵士家族の社会復帰支援をNGOインターバンドと協働で実施。

バタンバンにて、イタリアのNGOが運営するエマージェンシー病院へ、車椅子を提供。

2004



スタディツアーで、バタンバンにあるクメール財団が運営する孤児院ピースフル・チルドレン・ホーム2へ資金を提供。



地雷廃絶と被害者支援の会・熊本とともにカンボジア義肢装具士養成学校で勉強するウム・ソクンさんへ女性義肢装具士を養成するための奨学金を提供。

2006



スタディツアーでゴミの山の小学校へ。日本からの文房具を提供。



ラオス初視察

ラオス・シエンクアン県の不発弾汚染状況を視察。

2007

カンボジア義肢装具士養成学校で勉強するヒム・カンニャさん(写真右)へ女性義肢装具士を育成するための奨学金を提供。



カンボジア事務所設立

NGOインターバンドのカンボジアからの撤退に伴い、カンボジア事務所や現地スタッフ、車両を引き継ぎ、カンボジア事務所を設立。

リィ・サリップ

カンボジア事務所プロジェクト・オフィサー

カンボジアでの事業では、受益者たちが、「自分自身やその家族と、レジリエントな生活ができ、幸せ、平和、コミュニティの中での繋がりを感ずることができた。自然環境を守りながら、持続的に生活していくための技術、知識を持てるようになった」と言って貰えるように、心の中で常に想像しながら、活動しています。皆さまからの継続したご支援に感謝するとともに、安全と健康をお祈りいたします。

staff comment

2008



バタンバン州カムリエン郡オウ・チョムボック村で、魚の養殖用ため池10基の掘削(写真下)し、裁縫技術訓練を開始(写真上)。

サムロン・チェイ村に穂高小学校を建設

ラオスのシエンクアン県での不発弾汚染地域での学校建設のニーズ調査を実施(写真上)。地雷埋設地域のバヴェル郡サムロン・チェイ村に、株式会社穂高住販様からのご支援で、小学校を建設(写真下)。



ラオス・シエンクアン県ノンヘット郡にて不発弾撤去後の土地にプレマ株式会社様のご支援でプレマ・シャンティ中学校を建設。

2009



2020

ラオスのシエンクアン県ベック郡ヨードグム地域で、戦争を知らない7歳以下の子どもたちを対象に不発弾回避教育と生活基盤整備支援プロジェクトを実施。



同じくカンボジアの生計向上支援事業で、支援したヤギに子ヤギが生まれて喜ぶ地雷被害者ムオン・ルンさん(右)と農業専門家ポーン・サリー氏(左)。



同じくカンボジアの生計向上支援事業で、子ヤギが生まれて喜ぶ地雷被害者ムオン・ルンさん(右)と農業専門家ポーン・サリー氏(左)。

2019

ラオスのシエンクアン県ベック郡の不発弾汚染地域の2村で実施した養蜂支援事業で、収穫した蜂蜜を製品化して、販売を開始。



2017



ラオスのシエンクアン県ベック郡の不発弾汚染地域の2村で、産学民連携による持続可能な森林保全のための自然共生型産業の普及活動、ラオス不発弾汚染地域における養蜂の技術向上と普及を目指した"farm miel"プロジェクトを開始。

カンボジアのバタンバン州ロカブス村で生活する地雷被害者のスー・マウさんへ牛2頭を支援。

2016



カンボジアのバタンバン州ブレア・プット村に2014年に編入された地雷原の残るコミュニティの子どもたちへ幼稚園を建設。村の小学校が遠いために学校へ通えていなかった子どもたちへ基礎教育支援を実施。

2018



カンボジアのバタンバン州カムリエン郡の障害者100世帯へヤギの飼育支援を実施。他の牛や鶏、ハリナシミツバチの家畜とともに、単一換金作物の栽培だけに依存せず、収入源を多様化させる活動を実施。

同じくカンボジアの支援対象者100世帯へ生計向上支援を実施。支出を減らすために野菜栽培訓練を実施し、野菜栽培をする対象世帯のベッチ・サルンさん。



スーチャイ・ポンマワン

ラオス事務所 経理アドバイザー

サバイディー。私たちはラオスにおいて、対象の学校や村の子供たちに不発弾回避教育を実施しています。不発弾の危険から子どもたちを守るために、私たちが実施している活動に子どもたちが笑顔で参加し、楽しんでいるのを見ると私は幸せな気持ちになります。私は子どもたちが明るい笑顔、明るい未来とともに成長してほしいと願っています。

staff comment

2011



地雷埋設地域であったカンボジアのバタンバン州バヴェル郡のプロオ・ソクリアチ村とパイリン州オウ・チェット・プラム村に、小学校をそれぞれ建設し、雨季でも授業実施可能になった。

ラオスのシエンクアン県で活動する不発弾撤去団体MAG-Laoの女性不発弾撤去チームへ金属探知機6基を提供。



2010



カンボジアのバタンバン州カムリエン郡のまだ地雷原の残るオッチョンボック村の小学校を訪問したMerry Projectのメンバーと一緒に、子どもたちへの地雷回避教育を実施するとともに、地雷の危険性を知らせる"地雷うちわ"を配布。

2012



カンボジア・バタンバン州ブレア・プット村で、最貧困層の6名の女性へ裁縫技術訓練を実施。



カンボジアで活動する地雷撤去団体MAGの機械チームへの1年間の活動費を提供。機械チームが、より早く効率的に地雷撤去活動を実施することができるようになった。

2013



ラオスのシエンクアン県カム郡バハーン村で、不発弾撤去後に水道の敷設工事を実施。写真は、野菜栽培のプランターとして活用されている親爆弾の残骸の下で遊ぶ村の子どもたち。

2014



ラオス南部のアップー県で活動する不発弾撤去団体UXO-Laoの不発弾撤去活動を視察し、ラオス南部での不発弾汚染状況の調査を実施。



カンボジアのバタンバン州ロカブス村で、村人たちのミーティングを実施し、村の将来について話し合う村人たち。

2015



ラオスのシエンクアン県クーン郡ポーンサイ村の不発弾撤去後の土地に3教室の小学校を建設。学校の敷地内から4発のクラスター爆弾の不発弾が見つかった。

手塚治虫漫画なつかし話

「雨にも負ケズ」



2008年ごろ
駐在員の江角が現地NGOから
車を引き受けた



途上国での活動に車は欠かせない
そんな喜びも束の間...



スコールが降ったときは
車の中で傘をさして移動するハメに

アジアにおける自立と自治

#アジア事業



家族と過ごす時間が増えて、子どもたちも一緒に楽しんで家畜のお世話をしてくれています。

スン・シエンさん(仮名)

スヴァイ・チュロム村在住。地雷で右脚を負傷。以前はキャッサバ栽培と日雇い労働をしていたが、2017年から約3年間の生計向上支援を受け、現在は主に家庭菜園と家畜飼育で生計を立てている。奥さんと、5人の子どもたちとの7人暮らし。

家畜の飼育で安定した収入を得る

妻と、15歳から20歳までの5人の子どもたちと一緒に生活をしています。支援を受けるまではキャッサバの栽培をしていましたが、一年に一度しか収穫がなく、そのほかの時期は収入がありませんでした。そのため、私と妻とで日雇い労働をしていたのですが、それも仕事のある農繁期とそうでない時期があり生活は大変でした。食べるものが買えないときは特に厳しかったです。そこで、自分たちの生活を変えたいと思い、テラール・ネッサンスの支援で家畜を借りて飼育しようと思いました。一年目がヤギで、二年目がニワトリ、三年目はハリナシミツバチ、最後が牛です。2017年から開始して今も継続しています。

当時、家畜の飼育は村のなかでも新しい取り組みだったのですが、特に心配や不安はありませんでした。実際にやってみると、季節によっては気温差でニワトリが死んでしまうこともあり、ヤギがほかの畑の作物を食べてしまわないように気を付けないといけないなど、大変な面もあります。一方で、支援事業のなかで二人の獣医さんが訓練されていて、連絡をすればすぐに来て治療してもらえらるのありがたいです。



牛の世話をしに牛小屋へ向かうシエンさん

将来は子どもたちにもわけてあげたい

以前は時期によって収入が左右されていたので困っていました。けれど、今はどうしてもお金に困ったときには家畜を売ることができると、お米や野菜、病気のときの薬などを買うことができている。家畜飼育や家庭菜園を始めてからは、家族と過ごす時間が増えて、子どもたちも一緒に楽しんで家畜のお世話をしてくれています。支援を受ける前と後では、生活がかなり変わったと思います。ほかにも、家庭菜園の支援を受けて、野菜の種をもらい育て方を学びました。支援でいただいた水瓶や家庭菜園用のネット、ジョウロなどの道具も大切に使っています。私自身も家畜の飼育は継続していきたいですし、これから子どもたちが結婚して、自立していくときにも飼育できるように、家畜をわけてあげたいと思っています。



ヤギ飼育訓練を実施した時の様子



2017.5
2017年5月にグローバル経済のリスクとお金に関するリスクを実施。

2018
2018年に鶏飼育訓練を受けるとともに、鶏の感染症や病気の予防や治療に使える現地の数十種類の薬草を使った発酵液の製作をしている様子。

2019
ヤギや牛へのミネラルなどを補給するための固形栄養補助剤の製作訓練を実施。

2020.12
蜜源となる花も多く咲き始め、55mlの蜂蜜を収穫するとともに、2群に分蜂。

2021.09
シエンさんは、「支援してもらったものは、全部大切にしています。どれかを辞めたりすることはありません」と話してくれました。本当に大切に面倒を見てくれていて、少しずつですが、確実に収入源を増やして、レジリエンスを高めています。

Timeline showing support activities from 2017 to 2022:

- 2017: 家畜開始時期 (Livestock start period)
- 2018: 野菜栽培訓練 (Vegetable cultivation training)
- 2018: グローバル経済とお金に関するワークショップ(年1回) (Global economy and money-related workshop (once a year))
- 2019: 鶏 (Chicken)
- 2020: ハリナシミツバチ (Halimeliter)
- 2021: 牛 (Cow)
- 2022: (No specific activity listed)

INTERVIEW

江角泰

えずみたい(認定NPO法人テラ・ルネッサンス 理事・アジア事業マネージャー) | 大学在学中、テラ・ルネッサンスのカンボジア・スタディツアーに参加。京都で大学院に通いながら、テラ・ルネッサンスで2年間インターンを経験。2006年に職員となり、2008年よりカンボジアに駐在、ラオスを含めアジア事業全般の運営に携わる。

支援の哲学に触れる——
その土地、その人に合う支援のありかた

試行錯誤を 繰り返してきた日々

—活動の変遷について教えてください。

カンボジアにおける地雷撤去団体への資金援助から始まり、内戦中に怪我をした除隊兵士の支援、貧困層や地雷被害者の方々とを対象とした村落開発支援を行ってきました。私は2008年からカンボジア駐在員となり、地雷の被害が大きかったバットアンバン州の三つの村を中心に活動しています。2020年、コロナ禍でのロックダウンや、タイとの国境閉鎖、自然災害の影響により、出稼ぎや換金作物で収入を得ていた村人たちの生活は大きく変わりました。一方で、そういった外部要因の変化のなかで、私たちがしてきた支援の意味を村の人たちに理解してもらえようになつたと感じています。

—これまでの支援の状況や村の方々の様子はいかがでしたか？

権威主義体制下のカンボジアにおいて、

国レベルではなく小さなコミュニティレベルで自立と自治を進めていく必要があると考え、活動を進めてきました。技術訓練や教育支援など様々な取り組みをしてきましたが、村の人たちは生活のためになるべく早く、高額な収入が得られる仕事を求めていました。タイへ出稼ぎに行く人。換金作物の農地購入のために莫大な借金を抱える人。教育環境が整っていても、小学校を卒業する前にドロップアウトしてしまう子どもたち。そこには様々な要因からくる貧困の連鎖があり、私たちが提供しようとする家庭菜園や家畜飼育など、一見すると地道で遠回りの支援はなかなか受け入れてもらえませんでした。村の人たち自身も課題の本質がわかっていないことが多いので、要求に応えるだけでは問題の解決にはなりません。こちらから提案する必要があると思いつつも、何をどのように提供すればいいかわからず、上手くいかないと感じる時期が続きました。

そこにある価値を伝える

—成果が見えにくい期間が続くなか、大切にしていた考え方はありますか？

自分が行おうとしていることが単なるエゴなのか、本当に村の人たちのためになる

ことなのかを一つの基準として活動してきました。ただ、自分のやりたいことではないと上手いかなかったりもする。自分のエゴと相手のエゴをお互いに認め合って、重なる部分があれば一緒にやってみる。そこから外れると、単なる自己満足になってしまいう気がします。あと、自分も実際にやってみる。口で言うのは簡単ですけど、家庭菜園とかもやってみると結構大変なんです。支援を続けるなかで、最近特に大切だと思うようになったのは「そこにあるものを探す」ということです。内戦やグローバル経済によって、カンボジア人の自尊心は低くなつてしまっています。発展した隣国がまばゆく映り、きれいにパッケージされた商品が近代的に見える。けれど、かつて「森の人」と呼ばれたカンボジア人が持つ文化や技術には、目を見張るものがあります。それに自信を持つことができれば、そこにある資源や文化を自発的に活かして収入に変えていく人が増え、自立や自治に向かっていくのではないかと思います。そのためには、私たちがのように外から来た人がその土地の良さを見つけ、伝えてあげることが大切だと考えています。

—活動を振り返り、今感じていることを教えてください。

10年前に今と同じことをしていたら成功していたかというところではない気がします。これまでの時間があったからこそ、村の人たちも理解してくれましたし、私たちも学びのなかで見えてきたものがある。実際に成果も出てきています。各世帯がある程度の自立をし、生活に余裕が出てくれば、自治にも繋がっていくのではないかなと思っています。それぞれの文化をお互いに尊重し合うことを大切にしながら、平和をつくっていきたいと思います。



人間はひとりでは生きられない、
人間だけでも生きられない。





オテマ・ジミー
ウガンダ事務所長

ウガンダ北部の紛争下に活動を開始し、不可能にも思えた活動に取り組んできました。元子ども兵の方たちは得た技術で地元の人々へ商品を提供し、レジリエンスや人としての強さを発揮しながら平和と癒し、生活の良い変化を生み出し、私たちの希望になっています。北部では未だ経済格差を抱え、将来の平和を妨げる可能性があります。しかし日本の皆さまと連携しながら、課題解決に向けて果敢に取り組んで行くことができると信じています。

staff comment

2009



コンゴ東部にて、紛争被害を受けた女性たちへの農業支援や孤児や元子ども兵への教育支援を新たに開始。



ウガンダ北部で元子ども兵の訓練修了の様子。卒業後、76名の元子ども兵は、現地の公務員とほぼ同等の平均所得を得て、社会復帰を達成。

2010



卒業して、自らの仕事で子どもを養育し始めた元少女兵(右)とモニタリングする現地職員(左)。



コンゴでのマリアア予防のための蚊帳の配布。紛争下で緊急支援と自立支援を並行しながら実施。

2012



2012年開催の世界会議で招致した各国事務所のスタッフと。



国連平和の日に「平和の鳩」掲げてパレードするテラ・ルネッサンスで社会復帰に取り組む元子ども兵たち。(ウガンダ)



現地職員への研修風景。同年から施設の運営管理を現地スタッフ主導の体制に移行。(ウガンダ)

2011



紛争被害を受けた女性の簡易洋裁訓練施設。(コンゴ)



鈴鹿達二郎
アフリカ事業マネージャー

staff comment

ウガンダで活動をしていて「一人ひとり、それぞれ力を発揮する環境があれば、人は人生を変えることができる」と感じています。その変化には年月がかかりますが、「元子ども兵」、「難民」ということを感じさせず、むしろ、他の人たちよりも自信に溢れています。家族を支え、ビジネスを通して地域の人たちに洋服やセーター、家具、家畜を提供したり、家を建設したり。その姿にいつも励まされています。

コンゴの紛争の影響で、家族を亡くしたり、性暴力の被害にあった女性たちへの洋裁訓練



2008



ウガンダ北部の元子ども兵社会復帰支援センターを視察する現地政府高官、県知事、NGO関係者、在ウガンダ日本国大使。

コンゴ民主共和国において元子ども兵の社会復帰支援を開始。現地視察に訪れた創設者の鬼丸。



2007

ウガンダ北部にて76名の元子ども兵への職業訓練や基礎教育、平和教育などを開始。



アフリカ事業

Historical Changes of Africa Projects

の変遷



アフリカでの子ども兵問題の調査開始。鬼丸・小川らがウガンダ北部などを訪問し、関係機関や元子ども兵からの聞き取り調査を実施。

2004

2005



ウガンダ事業スタート

ウガンダ北部で元子ども兵の社会復帰支援事業を開始。地元の元子ども兵を受け入れているレセプションセンターと協力し、15名の元子ども兵の社会復帰を支援。



ウガンダにて不法小型武器問題の啓発活動を開始。不法小型武器破壊式典の様子。



コンゴにて、元子ども兵社会復帰支援の調査を開始。元子ども兵への聞き取り調査を実施。元子ども兵(右)と現地職員のトシャ・マギー(左)

コンゴ民主共和国事業スタート

2006

コンゴにて、現地パートナーと協働での事業を開始。不法小型武器問題の啓発ポスターの配布と掲示を実施。



ブランディング支援を開始



南スーダン難民へ生活必需品の物資支援。(ウガンダ)

日本から派遣した専門家のブランディング研修に参加する現地職員。地元の人たちが誇りに思う、ハチミツのラベル作り(ブランディング)が開始。



2016



制作された陶器類。



開業した木工所で働く8期生。

国連機関との連携を開始

2017



国連開発計画(UNDP)との協働事業で紛争被害者が乳製品を製造。



川島綾香

ブルンジ事務所長

アフリカの人々の「生きる力」に魅せられています。環境さえ整えば輝きは始める彼ら彼女らに、支援者の皆さまと一緒にじっくり寄り添うという役割は、私の誇りです。アフリカの人々のパワーを、私たちを通して日本の皆さまにもお届けしたいです。平和への長い道のりは試行錯誤の繰り返しですが、諦めなければいつか叶います。次の20年も一歩ずつ、皆さまと一緒に進んでいけたら嬉しいです。

staff comment

2015

ウガンダの木工大工の技術を身につけ収入を得る元子ども兵(8期生)。



ウガンダの元子ども兵社会復帰施設での洋裁訓練。



製品化された「アマホロ・ハニー(平和の蜂蜜)」(ブルンジ)



2013

ブルンジ事業スタート



洋裁訓練を受ける元子ども兵たち。(ウガンダ)



エジマナ・パシフィック

プロジェクトコーディネーター

テラ・ルネッサンスのブルンジでの活動は、受益者の生活をこれまで良い方向に変えてきました。私たちが養蜂や窯業、洋裁などの技術訓練などを通して、最貧困層の方々は、今も自分たちの手で収入を得て、必要なものを買うことができている。私たちスタッフも支援活動を通して、人生を良い方向に変えてきています。より良い世界のため、今後もより支援活動を広げていきたいです。

staff comment



オンズ自立支援センターの開所式に参加した当会職員及びパートナー団体職員。(ブルンジ)



センターの開所式でのインタビューの様子。(ブルンジ)



溶接技術を身につけて自立した元子ども兵が地元の病院から注文を受けてドア枠を制作している様子。(コンゴ)



2014

ウガンダの社会復帰センターで訓練を修了した元子ども兵へビジネス開業用の資機材を供与。

新型コロナ対策支援を開始



古岡 繭

アフリカ事業サブマネージャー

これまで、ストリートチルドレンやシングルマザーなど、困難な状況にながらも、当会の訓練で学んだ技術を使って、自身の手で生活を良くしていく対象者に何人も出会い、「誰にでも未来をつくる力はあるんだ」と元気をもらってきました。障壁にぶつかることもあります、決して諦めずに目標に向かって、しなやかに活動していくことが大切だと常に信じて活動しています。

staff comment

2020

新型コロナウイルス感染症対策のため、簡易手洗い器の配布の様子。(ブルンジ)



経済活動の制限により収入源をなくした元子ども兵たちがマスクを生産している様子。(ウガンダ)



国連開発計画 (UNDP) との協働で対象者が製造したパイナップルジュース。



ストリートチルドレン、シングルマザーらを対象にした養豚訓練で生まれた子豚を抱く対象者。(ブルンジ)



2019

元子ども兵及び孤児の受け入れ世帯への家畜飼育研修の様子。(コンゴ)



ストリートチルドレン、シングルマザーらを対象にしたヘアドレッシング訓練の様子。



ウガンダの南スーダン難民居住区で開始した洋裁の職業訓練。

2018



訓練修了後に開業したヘアドレッシングサロン。



洋裁技術を習得しミシンを受け取った受益者たち。(コンゴ)

「自転車タクシー」



動画でチェック /



“Terra Anthem”

We did not come to judge Terra, we did not come to fight
We did come to seek and find, and come to love them all

We did come to seek and find and come to love them all

And when you call us Terra, when you call us Terra,

And when you call us Terra...

Terra Renaissance live for long

Terra Renaissance live for long

“テラ・ルネッサンスの歌”

私たちがテラルネにやってきたのは、

互いに正義を振りかざすためでも、戦うためでもない

私たちがテラルネにやってきた理由、それは、ともに未来を模索し、

何かを見だし、そして、全てを愛するため

ともに未来を模索し、何かを見だし、全てを愛するためにやってきた

私たちがテラルネと呼ばれるかぎり

私たちがテラルネであるかぎり

テラ・ルネッサンスは、永遠に存在し続けるだろう

テラ・ルネッサンスは、永遠に存在し続けるだろう

アフリカにおける自立と自治

#アフリカ事業



ファッションデザインも学んで知識や技術を伝えたい

アリさん(仮名)

紛争が続く南スーダンから逃れ、2016年にウガンダ北部のパギリニア難民居住区へ。能力向上支援の一つである編み物クラスを受講し、トップの成績で卒業。洋裁技術も習得。既にサポートを受けながらビジネスを開始しているが、コロナ禍で仕事が少なく農業をあわせて行い、生計を立てている。紛争で親兄弟を亡くし、弟とおばさんの3人暮らし。

編み物と洋裁の技術で家族を支える

南スーダンから居住区に来て、ここは平和だなと思いました。自由に動けるし、自分を邪魔するものがない。南スーダンに居たころは、暴力を受けるのが日常茶飯事でした。今でも、帰ればすぐにでも殺されてしまうと思います。当時は農業や日雇いの仕事などで家族の生活費や学費を得ていましたが、逃げるたびに何もかも置いてきたので、こちらに来てからは何もすることがありませんでした。

そんなとき、テラ・ルネッサンスのスタッフが支援の調査で家に訪ねてきました。僕が、「やることがあれば何でもできる自信がある。生き残っている家族のために頑張りたい」という意思を伝えると、後日、訓練に参加できることが決まりました。

編み物のクラスを選んだのは、男性があまり選ばない分野なので自分が開拓していこうと思ったからです。編み物をするのは初めてでしたが、一番の成績で卒業できました。訓練で経験したこと全部が、僕にとって大事なものでした。先日、仕事の募集広告が出たのですが、訓練の先生たちを打ち負かして採用されたので、僕には才能があるんだと思います(笑)。



手縫いでパターンを施すアリの同級生

自ら生活できる幸せ

これまで、ビジネスのサポートを受けながら、セーターやテールブルクロス、ベッドシートを作って販売しました。ほかにも、お客さんのオーダーに合わせて柔軟に対応できます。

何もないところから始まり、収入を得られるまでになったことを誇りに思っています。そして、自分のお店を開いて、必要としている人に知識や技術を伝えたいと思っています。そのためにはファッションデザインも学んでいきたいです。

支援を必要としている人はまだまだたくさんいます。訓練の期間も、もう少し長ければもっと高度な技術を身につけられると思います。支援者の方々には本当に感謝しています。いつか日本に行けたら嬉しいです。



グループ登録の式典での様子

アリの支援フロー



2021.08~09
施設で様々なセーターの作り方を習得し、その技術で短期講師として他の地域の人たちに技術を教えました。



施設での訓練終了、資機材配布、ワークショップ建設完了



2021.4
施設で習得度を測る試験を受けるアリさん。



施設での訓練

受益者選定

テラルネの元でマスク訓練

ワークショップにてビジネス開始



編み物の短期講師として働く



2020.11~2021.5
パギリニア難民居住区内の訓練施設で編物の技術を学ぶ。

.9

.8

.6

2021.5

.11

2020.10

INTERVIEW

小川真吾

おがわしんご(認定NPO法人テラ・ルネッサンス 理事長・海外事業部長) | 大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通じた平和親善活動などに取り組む。2005年よりテラ・ルネッサンスのウガンダ駐在代表となり、元子ども兵社会復帰支援事業などに従事。2011年よりテラ・ルネッサンスの理事長に就任。

変化を信じ、小さな成果を積み重ねる

「これまでの経緯を簡単に教えてください。」
ウガンダ事務所を2005年に開設し、翌年にコンゴ民主共和国、2014年にブルンジと活動を展開してきました。開始当初には想像もできなかったほど活動の幅が広がり、ともに働くスタッフや支援者の皆様には心より感謝しています。同時に、アフリカで生きる方々から、たくさんの方々の大切なることを学ばせていただいた16年間でもありました。

「活動において、特に意識していることは何ですか？」

「私たちが支援の対象にしているのは紛争の影響を受けている国のなかでも最も脆弱な状況にある方々です。紛争の被害に遭い、差別や偏見を受け、小学校すら卒業していない。このような状況下で、本人さえ手に職をつけるのは難しいと思われている場合もあります。当たり前ですが、世の中に一人と

支援の哲学に触れる――

それぞれが持つ力を信じ続けた20年間

して同じ人間はおらず、直面している課題も違えば、歩みの速度も目標への道のりも一人ひとり異なります。そのなかで、私たちが意識しているのは包括的な支援です。働くために必要なものが、ある人にとっては知識や技術だけでなく、心理的なケアや周囲との関係性である場合があります。反対に、収入を得ることで自信を持てるようになることもあります。言い換えると、一つの物事の結果に



対して一つの原因があるのではなく、また複数の要因が直線的に結果へと結びついているわけでもなく、様々な要因が影響し合う関連性のなかでその時々結果が表面化してくるということ。そこに対して、現場では経済的、社会的、心理的な支援を包括的に行うことで、できる限り一人ひとりに寄り添った支援を実現できるようにしています。

そして、何より大事にしていることが「人は必ず変化する」。その人には必ず何かできることがある」という視点を、私たち自身が持っていることです。どれだけ困難な状況にある人でも、絶望的な心理状態が一日中続いているわけではありません。一瞬かもしれないませんが、気持ちが楽になる瞬間がある。変化の余地があり、一つひとつできることが増えていきます。その小さな積み重ねが目標に繋がっていくのだと、これまでの活動を通して実感しています。

「成果としては、どのようなものがありますか？」

「活動を重ねるにつれて、訓練を修了した方々の「その後」に、いくつかの共通点があることが明らかになってきました。なかでも特に印象的だったのが、子どもを学校に通わせることや、孤児を育てることで働く意欲が湧き、結果として収入向上に繋がっ



ていたということです。勉強や職業訓練に励み、手に職をつけて生活や人生を変化させてきた方々が、今度は子どもたちにかかりとした教育の機会を与えようとする。また、ほかの人を支えることで自信や誇りを持てるという声も多くあります。支援の先で、次の支援や思いの連鎖が起きるのだということを感じています。

アフリカの人たちから学んだ大切なこと

「平和を目指すなかで、注意していることはありますか？」

身近なことを考えるというのは、すごく大事だと思います。グローバルな平和を目指し、素晴らしい活動をしている方々が世界中にいますが、本人や周囲の安心を犠牲にしてしまっていることがよくあります。けれど世界の平和と自分自身の心の平和は「映し鏡」になっていて、両方がなければ究極的な平和には行きつかないのではないのでしょうか。私自身、多くの人々が命の危機に直面しているアフリカで活動していると、良くも悪くも強い使命感や正義感が出てきます。その際、一番大切にしているパロメーターは「must(すべき)」ではなく「want(したい)」の気持ちで動いているかどうかです。自分に対してこうすべきという脅迫観念で動いてしまうと、周囲にもそれを強制するという連鎖が始まってしまいます。仮に正しいことであつたとしても、外圧的に押し付けることで、その人の内発性を低下させてしまいます。その結果、世界平和を求めているのに、自分の周りが不幸になっていくという矛盾が生じてくるのだと思います。

立ち止まり、自分の心に意識を向ける

「これまでの活動を通して、小川さん自身が得た学びを教えてください。」



自分の限界を感じて絶望してしまうかもしれませんが、周囲には仲間がいて、相談すれば解決できるかもしれない。ここにあるリソースを活かして突破できるかもしれない。そこには計り知れない可能性があり、手詰まりになったときこそ、クリエイティブな創造が生まれてくるのだと思います。これまで、様々な困難を前に、レジリエントにプロジェクトを動かしてきてくれたのは、あるものを活かして乗り越えたいと思う私自身の好奇心と、日々を柔軟に生きるアフリカの方々からの学びがあったからだと思います。

「根本的な課題解決を目指して地道に活動を重ねてきたと思いますが、20年間続けられたからこそ提供できる価値は何だと思えますか？」

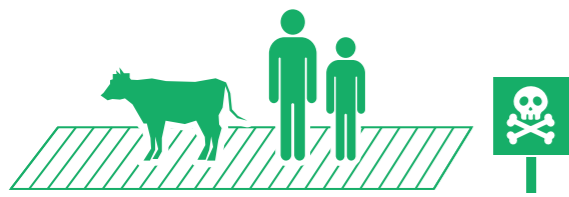
「これまで、世界のなかでも最底辺の境遇にある方々に寄り添いながら、精一杯の試行錯誤を重ねて活動を続けてきました。そのなかで、「質」の部分で大事なことを、私たちなりに学んできたと思っています。もともと、NGOという組織は欧米から広がりましたが、欧米的なノウハウを大事にしつつ、日本的な価値観をベースにした私たちの活動をしっかりとして体系化し、質量ともに高めて、世界に展開していきたいと考えています。

「ありがとうございます。これからも、テラルネらしさを大切にしながら、現地の人々に寄り添う支援を続けてください。」



地雷・不発弾撤去の総面積

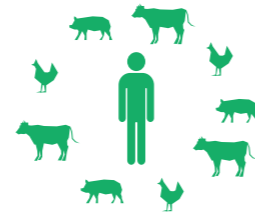
#アジア事業



2,958,665 m²

支援世帯による家畜の 販売・自家消費の総数

#アジア事業



4,820 頭 (229世帯に対して)

テラ・ルネッサンス 20年の成果総覧

アジア・アフリカで紛争被害にあった方々への自立支援をはじめ、東日本大震災における復興支援や国内の啓発活動など。20年の歴史の中で、テラ・ルネッサンスは多岐に渡る活動を力強く展開してきました。このページでは、それぞれの事業における主な活動の成果をご紹介します。

#アジア事業

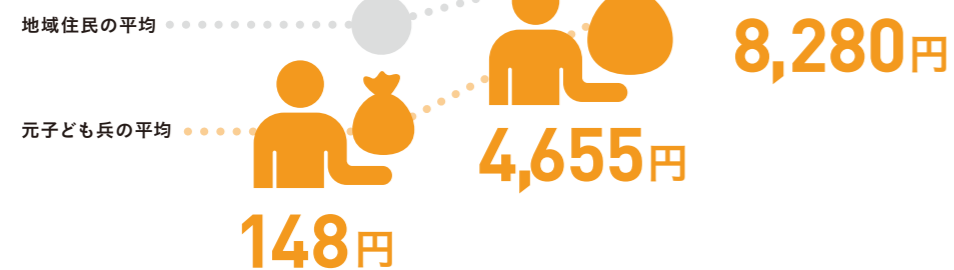
#アフリカ事業

#大槌刺し子事業

#啓発事業

支援を受けた元子ども兵の 収入の変化

#アフリカ事業



受け入れ時に収入がほぼゼロに等しかった(平均月収148円)元子ども兵は、3年間の支援後には平均月収が31倍(4,655円)に増加し、絶対的貧困の水準を超えて、地域住民の平均月収とほぼ同等になった。さらに支援後の8年間、自立した生活を維持し、平均月収は8,280円に増加。この額は、同時期の地域住民の平均月収の約1.6倍に相当し、周囲の貧困層を支援する元子ども兵も現れた。支援完了後も元子ども兵が、自らの力で、さまざまな困難に直面しながらも、レジリエントに生計を維持してきたことが伺える。

アジア・アフリカにおける 支援の受益者総数

174,000人以上

支援を受けた女性(元子ども兵)が蓄積した資産

#アフリカ事業



支援を受けた女性の資産

国平均の女性の資産

ウガンダでは、家や土地だけでなく世帯内の資産を男性が独占している傾向があり、主要な資産を女性が所有している割合はわずか11.3%。故に、シングルマザーとなった女性たちの生活は困難している。一方、支援を受けた女性(元少女兵)たちは、自立後の8年間、家族(主に子ども)の衣食住を満たすだけでなく、同国で一般的に普及している家財道具などの資産を男性世帯を含めた国平均と同等、もしくはそれ以上を保有することができている。基本的な家具を保有している割合は83.1%(国平均81.7%)、テレビは14%(国平均17%)、バイクは6%(国平均8%)、携帯電話は78.5%(国平均74.3%)。男女格差が深刻な同地において、彼女たちがいかにレジリエンスを高めてきたかが伺える。

刺し子さんへお渡しできた 工賃の総額

#大槌刺し子事業



約 39,784,000円

大槌刺し子との協働・連携事例

#大槌刺し子事業



①清原株式会社と刺し子手づくりキットのOEM企画開発を手掛ける ②刺し子さんがヨーロッパに渡航し、ワークショップなどに参加(企画:株式会社良品計画) ③大槌町のふるさと納税返礼品として採用 ④岩手県内の事業者と連携 ⑤いわての文化情報大事典に掲載 ほか多数

講演における講演受講者の合計

#啓発事業



208,585人

寄付をはじめ支援人数の合計

#啓発事業



ないもの探しではなく、あるもの探しを



刺し子商品のご購入は
インターネットから!

<https://store.sashiko.jp/>



2020



コロナ禍で迎えた10周年

世界中がコロナ禍に見舞われた2020年。大槌刺し子も感染防止に努めながら活動を実施。マスク不足が深刻になったことを受け、大槌刺し子ならではの「晒し」を使ったマスクを販売した。

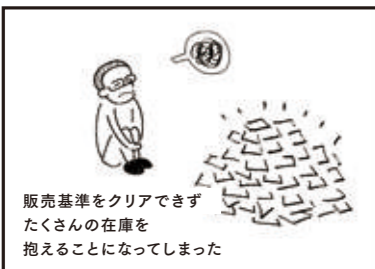
手塚治虫漫画なつかし話
「カモメの目」



当時の主力商品、大槌町をあらわしたカモメの布巾



刺し子の技術が安定してない頃だったので目の大きさがバラバラ...



販売基準をクリアできずたくさんの在庫を抱えることになってしまった



2019

2019年3月、三陸鉄道が全線開通したことを受け、大槌事務所にもたくさんの方々が訪問してくださいました。学生団体「大槌プロジェクト」の皆さんと、くるみボタン作りをする様子。



マチ付きポーチ

パティーズが企画からデザインを担当したマチ付きポーチ。ヘリンボーン柄は日本でも「杉綾」や「綾杉」ともして親しまれている。

2018



企業の方々とのコラボレーション。写真(下)はデザインによる社会的課題の解決に取り組むブランド「KUON」、(上)は手づくりキットのOEM企画開発を手掛ける清原株式会社との事例。

2017



みやびふきん

大槌刺し子らしさを考え抜き、満を待って発売したみやびふきん。草木染めの柔らかな風合いが特徴。

プロジェクト・マネージャー(当時)吉田の大槌事務所の常駐を廃止。パティーズによる事務所運営をスタート。

くるみボタン

刺し子の伝統柄と大槌刺し子らしいポップな柄をあしらったくるみボタン。発売当初、1ヶ月間の販売収益の一部を熊本地震の復興支援に寄付した。

伝統柄バッグ

岐阜県高山市で刺し子業を営むニツ谷恵子さん指導の下、伝統柄のバッグを制作。大槌刺し子、初めての本格的な伝統柄への挑戦となった。

2016



「私たちも力になりたい!」熊本地震が発生したことを受け、新商品のくるみボタンを寄付付き商品として販売。総額 54,421円 を被災地支援に寄付した。



大槌刺し子

Historical Changes of Otsuchi Sashiko Project

の変遷

2011



地域の集会所での刺し子会の様子。スタッフと談笑したり、刺し子の作品を手取る刺し子さんたち。

大槌復興刺し子プロジェクト開始



かもめコースター

大槌町のシンボル、かもめが空を飛ぶ姿をイメージしたデザイン。大槌復興刺し子プロジェクト初めの商品。



かもめふきん

ピンクとブルーの2色のかもめ柄のふきん。爽やかで優しい色合いのかもめふきんは好評を博した。

2013



マルチクロス

幸せを願う四つ葉のクローバーや大槌に茂る葉っぱをモチーフにしたマルチクロス。後に、「ひょうたん島」や「大漁旗」が加わった。

5年目を迎え、再出発



大震災から5年が経ち、プロジェクトも5年目に突入。刺し子さんたちとの大槌刺し子や大槌の未来についての話し合いを通して、プロジェクトの目指すものや考え方をまとめた。

2015

2012



大槌事務所での刺し子の商品化作業を手伝う刺し子さん。刺し子会では、和気藹々とみんなそれぞれできることを手伝いながら、商品をお届けしている。



佐々木加奈子

パティーズ

staff comment

10年の間に、刺し子を通して学んだ技術や伝統を、今に役立ていかせるよう大事にしていきたい。新しい刺し子や分野にも刺し子さんと一緒にアイデアをだしあい、挑戦していきたいと思う。コミュニケーションをとり、もっともっと元気で楽しい、みんなが集まれる場所を目指したい。これからも勉強しなければならないことがたくさんあるだろうと思う。探りながら少しずつ進んでいきたい。

刺し子を伝える活動をされている近藤陽結子さんを招いた技術講習会を開催。30名ほどの刺し子さんが参加し、晒しの裁断方法、下書きの方法など、刺し子の基礎を教わった。

2014



Sorakamoシリーズ

震災から3年目となる年に発売されたSorakamoシリーズは、大槌町のシンボル、かもめが空へと飛び立つ姿を自立へと向かう大槌の人びとと重ねた。

刺し子の原点に還り、前進する「大槌刺し子」

それぞれの想いが結集し、プロジェクトをつくってきた日々

糸、針、布、そして人の手があれば場所を問わずどこでもできる。東日本大震災の直後、避難所でも何事もなく気が持ちの沈んでいた女性たちを見て、立ち上げスタッフが考えたのが「刺し子」でした。まだ日本に物資が少なかった時代、貴重な布地を長く大切に使うための補修の技法として生まれた刺し子。各地で独自の発展を遂げ、東北地方では母親が娘を思つて布巾に刺し子を施し、花嫁道具として持たせる風習もあつたと言われています。



大槌刺し子が描く 小さな工芸産業

大量生産・大量消費の波に押され、日本全国でその土地の伝統文化が失われつつあるなか、大槌刺し子は10年間に渡り活動を続けることができました。ふるさと納税の返礼品としても取り扱われ、少しずつ大槌町に根付いてきています。その上で、私たちが大切にしている「自立と自治」という観点から、あくまでも刺し子さん自身が主体的に、持続可能な形で活動できることが重要だと考えています。多くの利益を求めめるのではなく、事業を継続するに足りるだけの利益を確保する。大槌刺し子の新しい方針は、そんな「小さな工芸産業」を確立し、伝統工芸の伝承や地方創生に繋がる一つの産業モデルとして社会にご提案することです。具体的には、

- 一、手仕事の価値を伝える
- 二、持続可能な社会をつくる
- 三、工芸と地方を元気にする

(大槌刺し子3つの目標)

震災当時、水産業が盛んな大槌町では住民の大半が海沿いの地域で暮らしていました。そのため被害も大きく、日常を取り戻してきた現在も大槌町では人口流出が続いています。

テラ・ルネッサンスが支援に踏み切るきっかけとなったのは、ウガンダ人

非営利団体として私たちが目指すものに共感し、ともに歩みを進めてくださる企業を含めた多くのステークホルダーの皆さまと協働していくことで、より多くの方々と一緒に生産と消費のあり方を変え、持続可能な社会づくりに貢献できると考えています。また、それに伴って、ロゴやウェブサイトもリニューアルしました。

2011年より、ウガンダの方々や東京のボランティアスタッフが、バディーズ、刺し子さん、支援者の皆様、あらゆる形で伴走してくださる本場に多くの方々の力が集まり、大槌の刺し子は今日に至ります。そんな「刺し子」が繋いでくれた縁をさらに広げ、大槌町の未来、ひいては日本の未来に貢献できる「大槌刺し子」を、皆様とともに育てていければ幸いです。



との温かな繋がりを感じられる家族のような関係のなかで、それぞれの役割を担い、事業を進めてきました。

手間をかける 大切なものが増えていく

震災から5年ほど経つ頃、復興が進むにつれて多くの団体が各々の目的を果たし活動を終えていくなか、刺し子事業も組織内外から継続の意義を問われるようになり、開始当初より独立および現地法人化を目指して準備を進めてきましたが、慎重に検討を重ねた末に方針を変更。その上で、「なぜ刺し子なのか」「テラ・ルネッサンスが運営する意味とは何か」と、職員や大槌事務所のスタッフであるバディーズ、刺し子さんたちと何度も話し合いを重ねました。そこで辿り着いたのは、「ものを大切に使う」という刺し子の原点。

一つのを大切に使い、傷んできたら修繕して長く使う。機械にはできない、手仕事ならではの技術です。そこに宿る人の思いやぬくもり。手間をかけることで生まれる、ものを大切に思う気持ち。ゆつたりと流れる時間は心を落ち着かせてくれます。そんな日本の価値観や豊かさを次の世代に引き継ぎ、平和で持続可能な社会の実現に貢献したい。今後は、新たに**3つの目標**を掲げ、「大槌刺し子」として活動を展開して参ります。



コンサルティングの視点から



十三代中川政七さん

株式会社中川政七商店 代表取締役会長

大槌刺し子(テラ・ルネッサンス)さんとの出会いは2014年に私が岩手県での講演後に開催した個別経営相談にスタッフの方が来られたのが最初でした。それ以降、大日本市での流通サポートや経営コンサルとして継続的に付き合いさせていただいています。

当初の復興支援目的から10年を迎えて、新たな地元産業として力強く生きていく道を模索されている姿に心打たれ少しもお役に立てればと思っています。

刺し子は言わずと知れた東北を代表する伝統技法ですが、実は大槌町が刺し子で有名な街であつたわけがありません。当初はその事を気にしておられましたが、今は伝統工芸とは言えないけど、30年続けば立派な伝統工芸ですよとアドバイスさせていただいたのを覚えていません。効率を追求することが是とされた時代が限界を迎え、環境だけでなく人の暮らしに寄り添ったサステイナブルな営みが大切であると感じます。大槌で刺し子さんたちとスタッフの方が仕事のやり取りをしながらお茶っこしている姿はまさに未来のものづくりのあるべき姿であると思います。非営利と営利をつなぐ難しさはありますが、それを乗り越えて未来の工芸のあり方を一つを指し示す取り組みとして永く続くことを祈念いたします。これからも微力ながら応援させていただきます。

吉田真衣 よしだまゐ(認定NPO法人テラ・ルネッサンス 理事・大槌刺し子事業部長・政策提言推進室長) 大学院在学中にテラ・ルネッサンスにインターン生として関わる。卒業後、民間企業への就職を経て、テラ・ルネッサンスに入職。海外事業の国内担当や会計業務などに従事したのち、大槌復興刺し子プロジェクト現、大槌刺し子)を担当。2021年には新たに政策提言推進室長を務める。

大槌刺し子の商品ができるまで

大槌刺し子の商品が開発から販売までに至るプロセスを、6つの段階にわけて解説。

事業を支えていただく人々の声を知ることで、
大槌刺し子をもっと好きになってもらえるかもしれません。

PROJECT FLOW

1 商品企画



商品企画では、どんな商品を作るか検討します。バッグやポーチ、コースターなど、アイテムのアイデア出しを行い、アイテムを絞ります。次に、そのアイテムについて、インターネットで調べたりし、デザインや価格帯などのイメージを決めていきます。

2 デザイン・試作



デザインをデザイナーさんに依頼するか、自分たちでデザインするかを決定します。自分たちでデザインする場合は、ラフ画を描き、デザインを決めていきます。同時に、必要な資材を調達し、原価計算をします。試作を進めながら、最終的なデザインや仕様、原価を決定します。

3 制作



いよいよ制作です。刺し子をするまでに、裁断、下書き工程を経て、材料を刺し子さんに手渡し、刺し子をします。刺し子が終わると、針目や生地不良など、一つ一つ検品を行います。製品の特徴に応じて、下書きを消したり、アイロンかけを行い、完成です。

4 工賃のお支払い



検品が終わったら、納めていただいた分の工賃を刺し子さんにお支払いします。検品で不具合が発生した場合には、解いて作業をやり直してもらうこともあります。刺し子さんにとっては緊張するひと時でもあるようです。

5 宣伝広報



完成した商品についてプレスリリースを発行したり、SNSなどを通じて、商品の告知を行います。

6 販売



大槌刺し子のオンラインストアや催事などで実際に販売し、皆さまのお手元に届きます。

刺し子さんのコメント

刺し子をする事で活路が開いた。

刺し子やりませんか？ってチラシを見た母が「一緒に行こう」と誘ってくれたことがキッカケでした。昔から、針とか糸とかが好きだったんです。最初は返し縫いだったので、これならできると思って楽しんでました。波縫いは難しく、あれをチクチク縫えるのは本当に上手な人ですね。それに、自分の好きなことを一生懸命やっていけば活路が開くことがあるんだなって思いました。刺し子に導かれた感じです。

佐藤淳子さん

刺し子さんのコメント

刺し子は自分の生きがい。

結婚する前は洋裁の仕事をしてたんですが、それから何年も針を持つことはありませんでした。震災後、近所で刺し子をやっているって聞いて、試しに始めてみたのがキッカケです。ひとつでもモノになっていくのは楽しいですね。病氣して入院した時も、刺し子なら出来ました。大袈裟ですけど、自分にとっての刺し子は生きがいです。私たちもいつまでやれるかわからないけど、大槌刺し子は続いてほしいなと思います。

大澤美恵子さん



久保光義さん

大槌復興刺し子プロジェクト発起人メンバー

大槌刺し子を支えてくださった方

鬼丸さんと初めてお会いしたのは震災後の2011年6月。有志5名でわずか2万円ずつを出資し、大槌復興刺し子プロジェクトを立ち上げた3ヶ月後の事でした。「やるからには最低10年やる」という言葉半信半疑で伴走開始。そこから数え切れないメールやミーティングを重ね、時には一緒に刺し子の手売りをしながら、卒業までの4年余りの時を共有させていただきました。「私達は微力だが無力ではない」という鬼丸さんの言葉を噛みしめる日々でした。そして2021年、10年前の約束は本当に果たされました。多くの人に対し、誠実にひたすら約束を守り続けて、今のテラさんはあるのでしょうか。一緒に頑張ってきたことに心から感謝します。これからも有言実行、世界を勇気で満たし続けて下さい。



平野公三さん

岩手県大槌町長

大槌刺し子を支えてくださった方

あの東日本大震災津波の苦難を乗り越え、活動開始された大槌復興刺し子プロジェクトの作品からは、作り手の皆様の復興への祈りが込められ、優しく温もりが感じられます。大槌町の姉妹都市との生徒間交流事業において、米国フォートブラッグ市へのお土産として大槌刺し子の商品をお届けし、大変喜ばれました。現在は、大槌町ふるさと納税の返礼品の一つとして、ご寄附いただいた方々へ届けられております。改めて、これまでのご協力に深く感謝申し上げます。結びに、認定NPO法人テラ・ルネッサンスをはじめ、関係者皆様の多大なるご尽力に感謝し、今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。



ニツ谷恵子さん

刺し子でデザインする

大槌刺し子を支えてくださった方

大槌刺し子の皆さん、頑張ってきましたね。皆さんの努力と、いろんな方々のお力添えで、素敵な作品作りができる大槌刺し子になっていくと思います。刺し子の作品制作の中で一番大切なことは、針を動かす時間を継続していくことだと思っています。一人の作業になりがちな刺し子という手仕事の中で、大槌刺し子は皆と協力し、時間と想いを共有し、様々な思いを布と糸に込めながら刺し子ができる素敵な居場所です。これからも皆で知恵を出し合っ、いろんな刺し子の作品作り挑戦していく姿を期待し、また楽しみにしています。私も引き続き刺し子を楽しみながら、飛騨高山から応援しています。



吉野和也さん

NPO法人アラマキ 副代表理事
大槌復興刺し子プロジェクト発起人メンバー

大槌刺し子を支えてくださった方

この度は、「大槌刺し子」の10周年、心よりお祝い申し上げます。インターネットを通して知り合った仲間たちと共に、大槌刺し子を立ち上げた2011年のことが今でも鮮明に思い出されます。大槌刺し子がこれからも続いていくことは、衰退している「刺し子」という伝統工芸を次の世代に伝えることができるということ。そして大槌町という過疎の町で新しい仕事を作ること、これは、町を活性化させ、日本の未来を作ることにつながります。長い間多くの方々に愛され続けているのは、テラ・ルネッサンスのスタッフの皆さんと刺し子さん達の真摯な仕事によるものと改めて実感しています。お忙しい日々をお過ごしのことと推察しますが、ご自身のお身体にも大切にしてください。これからも応援しています。

啓発事業

Historical Changes of Awareness Raising Projects

の変遷



ますます広がる支援と活動

2019

ウガンダにて、元子ども兵が夢を語る「ドリームプラン・プレゼンテーション」を開催。日本からたくさんの支援者が参加した。



アジアとアフリカの現地スタッフを招聘したイベント「世界会議」を、6年ぶりに開催。

2018



2016

社会と人々の安寧と幸福のための活動を評価いただき、「社会貢献者表彰」を受賞した。

2015

インターン同窓会を開催、これまでに100名以上のインターンを受け入れた。



2012

これまでの国際文化交流活動を評価いただき、「国際交流基金地球市民賞」を受賞した。

2014



ラオスの不発弾問題をテーマにデザインされたチャリティシャツを期間限定で販売。

2010

設立10周年記念イベントを開催。名古屋、東京、京都の三会場で、延べ489名に参加いただいた。

団体創設から10周年



2001

はじまりは鬼丸の講演から

ボランティアの皆さんの協力によって、九州で講演会を開催。テラ・ルネッサンスの活動は、講演によって広がっていった。



上野知子

啓発事業部 支援者サービス担当

ご寄付のお礼状、資料発送や住所変更など、私が支援者サービスを担当する中で感じるのは、ご支援いただく皆さんによって自分自身が「啓発された」ということです。ご寄付にくわえて「いつもありがとう」と言ってもらえる仕事はそうありません。皆さんの親切さや丁寧さから、私自身もそのようにありたいと感じています。親切さや丁寧さ、優しさや平等のうえに、平和が実現されていくのかもしれない。

staff comment

2006

設立5周年を記念して「全国キャラバン」を実施。アフリカ事業コーディネーターのトシャ(写真中央)が初来日した。



2005

大規模なイベントにも参加

「愛・地球博」における『アフリカの叡智プロジェクト』にて、鬼丸がプロジェクトリーダーを担当。ノーベル平和賞を受賞したワンガリ マータイさん、マンデラ大統領の孫であるセツア ドラミニさんとの対談を実施した。



2004

地雷廃絶を訴えるイギリスの社会運動家のクリスムンさんと一緒に、チャリティランに参加した際の様子。



小型武器に関するネットワーク会議に参加した際の様子。



「子ども兵」の問題について調査するため、ヨーロッパへ出張。NGOへのヒアリングを実施した。

2003



地雷廃絶をテーマにした「Lions Experience in Kyoto 2002」の開催に協力、約3,000人もの来場者の応対をボランティア150名で実施した。



2002



2008

初の単独著書となる創設者・鬼丸の出版記念講演会の様子。

オラクル漫画なつかし話
「非常に元気」



創設者の鬼丸が大阪の中学校で講演をしていると突然非常ベルが鳴り響いた



何事かと驚く鬼丸
しかし生徒たちは落ち着いた様子
そして再度鳴り響くベル



原因は「元気な生徒」のイタズラだった

中学・高校で受講しなかった人



中学・高校 大学 社会人

社会貢献活動への思いの強さ

中学・高校で受講した人



中学・高校 大学 社会人

社会貢献活動への思いの強さ

講演の影響と行動変化のモデル

講演の影響を受けた人々

講演を聞いて現地を訪問した大学生

「ウガンダで支援活動の実態を見て資料ではわからないことがあると思った」
「元子ども兵の方々は収入を得る方法だけでなく、生きる方法を学んでいた」
「環境、経済、持続可能性を海外の大学生はどのように感じているかもっと知りたいと思った」

学生の頃に講演を聞いた現在社会人

「中学生の頃に講演を聞いたことが、高校・大学進学に影響したのかもと思う」
「講演を聞いたことで、将来について考える時期に自分の中にある関心について考えた」
「特別な知識や経験がなくても、いまの自分の立場でできることがあるのだと思えた」

外部機関による事業評価

国際協力に興味を持つ学生へ現場を見せる

現地でテラ・ルネッサンスの活動を見ることで、その後の進路決定(行動変化)だけでなく内面的な成長にも大きく影響を与えていると思われる。講演により、事前に情報や疑問を蓄えることができるので現地に行ってから発見や気付きが生まれやすい。職業訓練の実態から「お金ではなく、自立のサポートが必要」という価値観を生み出している可能性がある。

小中学、高校生への講演が進路へ影響

自らの人生について考えるとき、多くの人は、自分の心の中にある「関心の種」に気付き、芽吹かせる。そのため、講演参加者の状況にあわせて講演に参加してもらうことは有用であると考えられる。はじめの講演では社会課題について知り、2度目の講演では進路を考える時期に実施することで、その後の進路選択に影響を及ぼしている可能性がある。

【NPO法人テラ・ルネッサンス 事業評価プロジェクト】パナソニック プロボノ テラ・ルネッサンスチーム 2020 最終報告書参考



海外の支援活動を「紛争への対処」とすれば、国内の啓発活動は「紛争への予防」といえます。世界の現状を知り、「自分にできること」を考えてもらうきっかけを提供してきた啓発(講演)についてご紹介します。

平和教育・講演活動

いま、平和の種を蒔く

#啓発事業

試行錯誤を繰り返してきた日々

テラ・ルネッサンスでは設立当初から2021年3月まで2065回、述べ208,585人に対しての講演を実施してきました。ありがたいことに現在では、地方自治体や小中高学校などの教育機関、一般企業での社内研修など、講師としてお呼びいただく場所も多岐に渡ります。様々な場面でご用命いただけるようになった背景には講演に参加される方がどのような方々なのかによって内容やエピソードを変えたりしながら、「講演参加者ひとり一人に寄り添うため」の様々な工夫をしています。例えば、ある中学校の平和教育の一環として講演を行うとき、まず対象となる学年・学級の普段の雰囲気や事前に関心のある内容を把握し、講演のテーマに沿って話の流れを組み立てます。テラ・ルネッサンスが扱う子ども兵の問題や紛争の被害について、対象となる生徒の関心や理解度に合わせ、興味を持ってもらえるようクイズを出したり、生徒が好きそうな話題を出して共感を得られるようにしたり、常に多種多様な展開を考えて講演に臨みます。また、私たちが扱う紛争問題の話では、時として衝撃的な内容にも触れることがあるため、聞き手に大きなショックを与えないよう相手の状況や背景を配慮しつつ、世界が抱える課題の現状、そして「ひとり一人に未来をつくる力がある」というメッセージを届けるように心がけています。

行ってきましたが、講演の効果というのは漢方薬のようなものだと思えてきます。即効性のある西洋医学の薬ではなく、時間はかかるけれど後にじっくり効いてくる薬のようなものです。講演の直後だけではなく、その何年か後になって社会問題への取り組みが始まったり、国際協力に関わることに興味を沸いたり、NPOに寄付をしたり。講演参加者が講演を通して何かを感じ取り、その先の行動として表れるのは、人それぞれのタイミングがあると思います。大切にしているのは、私たちが講演を通して伝えていくことで、より多くの方に世界の課題に対して目を向けてもらうきっかけをお届けすること、言い換えれば種蒔きをするということです。その種はいつ芽吹くかはわからないけれど、世界の課題の解決には一人でも多くの仲間が必要です。ともに良い世界をつくっていく仲間が一人、また一人と増えていくことを信じて、これからも講演に力を注ぎたいと思っています。

先日、そんな願いを込めて講演をした小学6年生からこんな感想が届きました。「一人ひとりが思う、考える平和は、それぞれ違うけど、その違いを受け入れることが大切だと改めて思った。これからは、意見や考えを受け入れ、認めていきたい。自分のことを知ってもらい、自分も相手のことを知りたいたい」。講演を聞いてくださった方々が自分の言葉で平和を意識し、行動する。それが、テラ・ルネッサンスが目指す、平和な社会の実現への近道なのだ、私は思います。

啓発事業部 講演企画・支援連携担当 栗田佳典

私にできる社会貢献

社会を変える暮らしの選択

#啓発事業

地雷や子ども兵の課題解決のため、その貢献の方法はお金の寄付だけではありません。社会貢献に繋がる暮らしの選択肢を増やすことで、市民の一人ひとりと一緒によりよい社会を作っていくための方法をご紹介します。詳しくは右記QRコードからご覧ください。



● 寄付つき商品・サービス ● めぐるプロジェクト(回収系支援) ● 法人サポーター後援会組織 ● 講演・イベント

秋田県 iPOSH / iWASH / Pharmal 除菌消臭液等の収益の一部が寄付に 協働事業者 株式会社Local Power	栃木県 タイヤ タイヤ1本につき20円が寄付に 協働事業者 有限会社アップライジング	神奈川県 ZERO PC エシカルパソコンの収益の3%が寄付に 協働事業者 ビールポート株式会社
秋田県 アルサポ 中古アルミホイールを回収して寄付に 協働事業者 有限会社アップライジング	東京都 トートバック トートバック1つにつき150円が寄付に 協働事業者 NPO法人Bonds of Heart	東京都 テラ・ルネッサンスひかり 通信料金の収益の一部が寄付に 協働事業者 株式会社FISソリューションズ
長野県 キフ★ブック 古本を回収して寄付に 協働事業者 株式会社バリューブックス	山梨県 テラ・ルネッサンス共済 保険・共済の収益の一部が寄付に 協働事業者 富士少額短期保険株式会社	東京都 テラ・ルネッサンスサポーターズクラブ 東京 東京都内にある法人サポーター後援会組織 協働事業者 東京都内に所在地を置く法人サポーター各社
東京都 マスク マスク1つにつき100円が寄付に 協働事業者 株式会社RICCI EVERYDAY	東京都 つながる募金 携帯電話利用料と一緒に募金ができる 協働事業者 ソフトバンク株式会社	東京都 テラスタイル東京 東京都内で開催される定期イベント 協働事業者 ファンクラブ会員の皆様

支援連携

読み終わった本や使い終わった携帯電話など、身近なモノが寄付になる「めぐるプロジェクト」。商品やサービスを購入・利用するたびに、テラ・ルネッサンスへの寄付になる「寄付つき商品・サービス」。私たちの想いに賛同いただいた企業の皆さんと、社会課題の解決に、多様な方法で、気軽に参画できる機会を作ってきました。そうすることで、誰もが社会課題解決の担い手となり、平和を作る運動が広がっていくと信じているからです。



藤森みな美
啓発事業部
寄付・法人連携 担当



海外ファンドレイジング

2020年度より、本格的にスタートした、日本国外からの資金調達を目指す海外ファンドレイジング事業。まずはアメリカ、そして台湾への展開を進め、英語・中国語(繁体字)でのWEBページ・SNSの開業や、オンライン講演などを実施しています。さらなる事業拡大のための資金調達を目的とすると同時に、「世界平和の実現」を目指し、共に歩む仲間を世界中で増やしたいと願っています。今後は、支援者の方々とより深い関係性構築のため、台湾現地での事業展開により一層注力していきます。



島彰宏
啓発事業部
オンラインマーケティング 担当



岡山県
お米
お米の収益の約10%が寄付に
協働事業者 むらい農産

兵庫県
フクサポ
衣料品を回収して寄付に
協働事業者 株式会社kurokawa

京都府
革財布
革財布1つにつき1,000円が寄付に
協働事業者 Antaskalana Japan

兵庫県
水サポ
天然水(ウォーターサーバー)12Lにつき240円が寄付に
協働事業者 株式会社kurokawa

京都府
ぬいぐるみ
ぬいぐるみの収益の50%が寄付に
協働事業者 株式会社AFURIKA DOGS

京都府
ケータイ for コンゴ
使用済み携帯電話を回収して寄付に
協働事業者 安田産業株式会社

佐賀県
テラ・カフェ佐賀
佐賀県内で開催される定期イベント
主催 テラ・ルネッサンス

京都府
テラ・カフェ京都
京都府内で開催される定期イベント
主催 テラ・ルネッサンス

東京都・鹿児島県
テラ・ルネッサンスでんき
電気料金の収益の2%が寄付に
協働事業者 happy energy株式会社 / 太陽ガス株式会社

東海地域
テラ・ルネッサンスサポーターズクラブ 東海
東海地域にある法人サポーター後援会組織
協働事業者 東海地域に所在地を置く法人サポーター各社

愛知県
コシサポ
古紙を回収して寄付に
協働事業者 興亜商事株式会社

その他、募金箱の設置団体・企業様も全国多数！
なお、それぞれの取り組みは2021年11月末時点の内容です。

千葉県
テラ・ルネッサンス後援会 千葉
千葉県内にある法人サポーター後援会組織
協働事業者 千葉県内に所在地を置く法人サポーター各社

千葉県
焼き鳥
焼き鳥1本につき1円が寄付に
協働事業者 焼鳥丸十

愛知県
ウガンダコーヒー
コーヒー販売の一部が寄付に
協働事業者 株式会社クリスタル

佐賀事業

佐賀事業では、ふるさと納税を活用した寄附の窓口を提供しています。さらに、中高生を対象に、社会課題の解決と世界や地域の平和構築に資する「グローバル人財育成事業」を開始。本事業は、国内の啓発活動と海外の支援活動をより深く連携させた長期的な教育プログラムであり、企業版ふるさと納税(寄附)によって支えられています。佐賀・九州を「平和の輪」の一大拠点とし、「社会変化を促す運動体」の実践の場を拡大しつつ、将来的には海外の教育機関でも展開していきたいと考えています。



佐々木純徹
啓発事業部 佐賀事業
政策提言推進室 担当





TALK SESSION
支援者座談会

寄付をはじめ会員や古本回収など、テラ・ルネッサンスでは活動に参加いただくための多様な支援の窓口があります。それぞれに適した方法でご支援をいただき、皆さまをゲストに迎え、テラ・ルネッサンスについて語り合っていました。

(編集部)今日は、いつも様々な形でご支援いただいている皆様に、テラルネとの関わりや今後のテラルネに期待されることなどについて伺えればと思います。まず、自己紹介からお願いします。

(坂本)私は宮崎で訪問看護師をしています。テラルネの設立直後くらいに、まだ大学生だった鬼丸さんの話を聞く機会があり、地雷原や平和への熱い思いに衝撃を受けたのが支援のきっかけです。話を聞いたのは、小さなミーティングルームでした。鬼丸さん一人で始めたテラルネが、20年後の今ここまで大きくなり、感動しています。

(上野)私も宮崎在住で、地雷ゼロ宮崎というNPOを主宰しています。20年前、坂本さんから「すごい大学生がいるから、話を聞いたほうがいい」と言われ、ちょうど関西に行く用事があったので、鬼丸さんに会ったのがテラルネとの出会いです。その時、地雷の現状を知ってショックを受け、自分にも何かできないかと考え、NPOを立ち上げました。以来、鬼丸さんの講演会を主催したり、カンボジアでテラルネと一緒に支援活動をしたりしています。鬼丸さんとの出会いがなければ、今の活動はないので今日は感慨深いです。



鬼丸による講演の様子

(廣瀬)今日は、キフ★ブックのお手伝いをさせていただいているバリュースタッフを代表して参加しました。鬼丸さんや栗田さんの話を聞いたり、スタッフの方々と接したりする中で、テラルネの世界観は素晴らしいと感じています。それは何かというと、社会に対する「怒り」です。その世界観を、皆さんもご存知のようなシンブルでわかりやすいストーリーと表現で伝えている。テラルネは、世界観、ストーリー、そして表現という3つのパラメータが絶妙だと思っています。ただか評論家みたいですが(笑)。

(谷本)今、私は大学でコンゴの研究をしている先生の事務補佐や、コンゴ

の性暴力被害者支援などに関わるNPO法人RITA-Congoの事務局長員をしています。元々、紛争問題や難民支援に興味があったのですが、大学の授業で小川さんの話を聞いたことがきっかけで、ファンクラブ会員として支援を始めました。現地で直接支援はできませんが、テラルネを通じて行う支援も大切な手段のひとつだと感じています。一昨年はウガンダのスタディツアーにも参加し、貴重な体験ができました。

(向井)私が勤めている大阪府立佐野高校では、2008年から鬼丸さんや栗田さんの講演を毎年開催させていただいています。社会の現状をわかりやすく伝えてくださるので、生徒たちは自分の暮らしが問題に関わっているのだと実感し、深く考える機会になっています。またカンボジアのスタディツアーも行っていて、私自身も2回引率しました。が、参加した生徒たちは、「本当の豊かさや幸せとは何だろう」と考えるようになったようです。世界の問題に興味を持つようになったり、国際支援の道を志したりする子どもも少なくありません。テラルネならではの、きめ細やかなプログラムやサポートに感謝しています。

(今井)私は起業家支援のコンサルタ



坂本千佳さん

20年ほど前に創設者の鬼丸と出会い、地雷原等の話や熱い想いを聴いて衝撃を受けたのが支援のきっかけ。テラ・ルネッサンスの理念や現地の自立支援という活動に共感し、ファンクラブ会員を継続。最近ではふるさと納税の返礼品を楽しみに、支援方法を組み合わせている。

谷本智紀呂さん

「キフ★ブック」という制度を利用。部屋の片付けの際に出るゴミとしての古本を出すことによって支援に貢献できることが魅力。現地に行つて支援活動に参加することは難しいが、毎月の寄付を通じて少しでも役に立てればという想いから、ファンクラブ会員としても寄付を継続している。

今井孝さん

自身のビジネスを通じて日本国内の起業家育成という自立支援を行っている。ビジネスではカバーできない自立支援については事業利益の中から拠出すべきだと考え、テラ・ルネッサンスに寄付を行っている。創設者の鬼丸とは長い付き合いの仲。

向井小雪さん

大阪府立佐野高等学校の教員として、生徒を連れたカンボジアスタディツアーの引率を行う。スタディツアー実施中・前後の生徒の成長を肌で感じるのが醍醐味。また、校内での講演会の開催を行うかわら、生徒にも伝わりやすく、かつ世界や日本の現状を深く理解できるところに、鬼丸や栗田の講演の魅力を感じている。

上野匡毅さん

地雷ゼロ宮崎の代表として2002年にテラ・ルネッサンスのカンボジアスタディツアーに参加して以来、支援を継続。現地の状況を的確に把握しているカンボジア駐在代表の江角とは古くからの付き合いで、現場に必要な支援を今後も続けていきたいと願う。

廣瀬聡さん

古本の買取金額をテラ・ルネッサンスへの寄付金に変える仕組みキフ★ブック(チャリボン)を構築した株式会社バリュースタッフの社員。本を通して「平和な世界を実現する」という、テラ・ルネッサンスと共通するビジョンを掲げ、日々、ソーシャルビジネスに向き合っている。

(編集部)それぞれの思いをお話しくださり、ありがとうございます。皆さんが、テラルネのどんな部分に共感や魅力を感じてくださっているのか、さらに伺いたいです。



カンボジアでのスタディツアー



(坂本) 私が共感しているのは、20年前と変わらない理念を持ち続けているところですね。初めて会った時から、鬼丸さんは、世界平和を訴えていました。その思いをずっと大事にして実行に移した結果、今がある。それは、みんなが平和を望んでいるということだとも思います。その一方で、震災後のテラルネは、岩手県大槌町での国内支援にも乗り出しました。そうやって変化しながら、理念に沿って活動しているところも素晴らしいと思います。

(上野) テラルネの設立目的は「世界平和の実現」であり、「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」ですが、すべての人間ではなく、「生命」と謳っている。私はここに共感し、私自身の団体の理念を作る際にも参考にさせていただきました。

(今井) そう、理念のスケールが壮大ですよ。しかし活動自体はコンパクトなサイズで、自分たちのできる範囲に絞り、しっかりと実績を出し続けている。そうやって毎年着実に成果を上げているテラルネの姿勢は現実的で、私はとても好きです。

(廣瀬) 先ほど、テラルネの世界観は、社会に対する「怒り」だという話をしましたが、その怒りとは、私た

ちが安穏と暮らしている一方で、世界には、地雷原で生活せざるを得ない人たちが、母親を殺せと言われる子どもたちがいる。そんな理不尽な世界に対する怒りだと思っています。そのような強い怒りが根底にありながらも、テラルネが伝えるストーリーや表現は、とてもきれいなというか、説得力があります。本にたとえらなら、テラルネは、良い本のような存在だと思います。

(今井) テラルネの伝え方はバランスがよくて、私たちの罪悪感に訴えませんが、その代わり、「皆さんのおかげで、どんどんよくなっています」という感謝のメッセージを届けてくれる。そうすると寄付しやすくなり、支援し続けたいと思います。皆さんは、どうですか？

(谷本) 私も、テラルネが折に触れて私たちサポーターに感謝を伝え、大事にしてくださいっているのを感じます。2、3年前から素敵な誕生日プレゼントが届くようになりました。現地の切手を貼ったエアメールが届くと、支援先とのつながりを感じて嬉しくなります。そういった細やかな配慮が素晴らしいと感じています。

(坂本) 私も、郵送でいただいている

ないことも多いのですが、テラルネでは噛み砕いて伝えてくれるので、切実なものとして自分にひきつけて考えられるようです。これからも、そのスタンスで、我が校の生徒を始め、多くの方に伝えていってほしいです。

(編集部) 皆さんのお話を伺って、「テラルネ、結構がんばっているな」と、勝手ながら思いました(笑)。では、今日の振り返りも含めて、今後のテラルネに期待することを、ぜひ教えていただければと思います。

(上野) 今日は、テラルネを通して支援を続けてこられた皆さんと繋がることができてありがたかったです。テラルネがなければ、地雷ゼロ宮崎もなかったし、20年も活動を続けてこられませんでした。人も組織も、また地球も変わり続けていくものなので、テラルネも時代に合わせて、進化していくと思います。私たちも、それに合わせて進化や変化を遂げながら、一人ひとりの立場や持ち場で、お互いにやることをやっていければと考えています。

(向井) 確かに、それぞれの人がそれぞれの立場でできることをすればいいのです。私は支援の現場に直接行けないので、自分には何もできな



カンボジア農村部の女性たち

いと感じたこともありました。しかし、国際開発教育の授業や講演会の開催、スタディツアーの引率などを通して、私も貧困や紛争をなくすプロセスの一部になれているのだと改めて感じ、とても嬉しくなりました。私はテラルネの理念が大好きなので、これから規模が大きくなっても、平和の実現へ向けて、今のスタイルで活動を続けていきたいです。

(坂本) 皆さんが、いろいろな思いを持って支援されていることがわかり、多面的にテラルネをとらえ直すことができたいと思います。私も、自分にできることを続けます。まずは、キフ★ブックに本を送ります。

ポストカードをいろんな所に貼って、落ち込んだ時に見るんです。この方達が自立して安定した暮らしをいとなむために、自分も役に立てたのかなと思うと、自信や元気が湧いてきます。罪悪感から支援するのではなく、支援することで自分自身が元気をもらえる。そんなサイクルがあったから、今まで続けてこられたのだなど、お二人のお話を聞いて気づきました。

(向井) 世界の現実を心に響くように伝えてくれるのも魅力のひとつだと思います。鬼丸さんや栗田さんの話を聞いた生徒の感想で、「一番多いのが「とてもショックだった」というものです。遠い国の問題や大きな社会課題は、生徒には受け止めきれ



現地の職業訓練で作成されたマスクとコースター

縫の訓練を受けた卒業生の素敵なバッグ類を買わせていただきました。日本でも、それらの製品を買って支援できるようになる日を、楽しみにしています。

(今井) 私は、自立できる人をどんどん増やせよと良い世の中になると思って、日本で起業支援の仕事をしています。テラルネは、海外で、しかも傷ついた人たちが相手に、自立支援をずっとやってきたわけですよ。カンボジアやアフリカでマイナスの状況から自立を目指すのは、とても難しいことだと思うので、純粹にすごいと思います。同時に、そこでできたつながりは、何十年後の日本に大きな価値をもたらすのではと思っています。もしかすると、「あの時、テラルネの活動に助けられた」という人たちが、日本の危機を救ってくれるかもしれません。私は国内で自立する人を増やすために活動するので、テラルネには自立支援を通して、海外との交流をさらに広げていっていただきたいです。

(編集部) 今日は、貴重なお話をありがとうございました。これからも皆さんとともに、平和の実現に向かって前進していきます。変わらぬご支援をお願いいたします！

元子ども兵がみつけた、 生きがいのある暮らし。



過去15年間の調査から「自立の達成・維持」と「自尊心の程度」には相関関係があることがわかりました。自尊心の高い対象者には、他人や家族・親族へ貢献しているという共通点があり、そのことが自身の存在意義と価値を見出し、自尊心が回復し、仕事への意欲を駆り立てていることが伺えます。社会復帰を果たした対象者(主に女性)は、かつて絶対的貧困層にあったにもかかわらず、自立支援後、子どもを中等教育に就学させている割合は58.3%で国平均(15.9%)の約3.6倍。また、平均1.3人の他人の子どもを養育し、家計支出に占める子どもへの教育費の割合は17.1%で国平均(7.8%)の2倍以上でした。

私はアフリカで生まれ、紛争の中で多くの女性や子どもたちが亡くなっていくのを目の当たりにしてきました。そして、テラルネの職員として、元子ども兵や紛争の被害を受けた女性たちの自立支援に関わってきました。ウガンダでは、少女時代に誘拐されて、兵士として強制的に戦いに駆り出され、10代で強制結婚により子どもを出産してきた元子ども兵たちに長年寄り添ってきました。彼女たちは、帰還してからも親を亡くしていたり、親戚から厄介者扱いされたり、心身ともに傷を負いながら、一般社会で生きる術もなく絶望的な状態に陥っていました。

しかし、この16年間の彼女たちの歩みを見てきて、大きな気づきがありました。それは、どんなに絶望的な状況にあっても、「人は支えられる存在から、支える存在に変化することができる」ということ。そして、それを信じ、その環境を整えることが自立支援を行う上で最も大切だったということです。

実は、自立を達成し、それを維持していた元少女兵に共通していたことは「人を支えることで、自尊心が向上していた」という点でした。

自身の健康や生活水準が低下してでも、コミュニティの貧困層に食事を提供したり、洋裁技術を教えたり、他人の子どもを養育したり、生活費を切り詰めて子どもに教育の機会を与えていたのです。

援助する側は、どうしても対象者の健康や生活のことを心配し、保護することばかりに目を向けがちですが、長期的に見れば、彼女たちの周囲の人々に対するこうした主体的な行動や意思決定を尊重していくことが、最終的に一人ひとりのウェルビーイング(生きがいのある暮らし)に繋がっていくと私は考えています。

欧米のNGOと比べて、こうした考え方に理解を示してくれている日本人たちには心から感謝していますし、私自身、テラルネの一員であることを誇りに思っています。



トシャ・マギー

アフリカ事業コーディネーター。自身も紛争で子ども時代に家族を失う経験を持ち、この16年間は、主にウガンダの元少女兵の社会復帰支援や、コンゴの紛争被害女性の支援に従事。

Life is beautiful



テラ・ルネッサンスを応援してくださる皆さん

様々な分野で活躍される有識者の方々から
テラ・ルネッサンスの20周年に際して
応援コメントをお寄せいただきました。



今井紀明さん
認定NPO法人DxP 理事長

テラ・ルネッサンスの活動を私は高校時代からみていました。高校1年生のときにG11のテロがあつてアフガニスタンの空爆をテレビでみていたときに「子どもの不条理な現状を変えていきたい」と強く思い、様々なNGOの活動を見ている中でテラ・ルネッサンスさんのことを見聞きしていたのです。

そこから20年の時を経て、私は10代の孤立を解決するという信念を持つてNPOとして事業立ち上げ、去年はテラ・ルネッサンスさんと共同で国内の10代の支援もしてきました。子どもの不条理な現状を変えていくことを一緒にやってできるというのは不思議な縁だと思っています。

パンデミックの中で、紛争や貧困で苦しい影響を受ける子どもたちが世界で増加しました。改めてこれからも共に行動をしていくことができると思っています。20周年おめでとうございます。これからも一緒に頑張って動いていきましょう。

テラ・ルネッサンス創立20周年、まことにおめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。2030年に向けて平和で繁栄した世界をつくるための国際社会共通の目標SDGs、その達成には国境を越えてグローバルな課題に取り組む市民社会組織としてのNGOの役割が大きな鍵になっています。テラ・ルネッサンスは、SDGsの前身のMDGsの時代から、海外での地雷撤去支援や子ども兵の社会復帰支援、日本国内でのアドボカシー活動など、国内外において「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」のために20年の間多大な貢献をしてこられました。なかでもコンゴ民主共和国では、国内避難民や紛争で家族を失った女性たちへの自立支援活動において、彼女たちを、食料を与えられる存在から食料を供給する存在へとエンパワーする活動をUNDPとともにやる頼もしい存在です。今後もともにパートナーシップを築きながら、SDGsの達成を支援していきましょう！



近藤哲生さん
国連開発計画(UNDP)駐日代表

鈴江奈々さん
日本テレビ アナウンサー



鉱物資源をめぐって内戦がおきているコンゴ民主共和国。ここで採掘されるレアメタルは、私たちの手元にあるスマートフォンにも使われている。しかしその実態についてはなかなか知られていない。スマホなど小型家電は、使い終わったら捨てる？リサイクルする？どうしたらいいかわからず、家の中でしまったままという人も多いだらう。私はリサイクルの大切さを伝えるために、テラ・ルネッサンス取材した。なぜならテラ・ルネッサンスは現地での活動をしているからこそ、コンゴの人達の暮らしぶりやレアメタルの意味をよく知っているからだ。「私たちの使っているものの先に紛争がある」鬼丸氏がまずは知ることの大切さを教えてくださった。遠い世界の話でも「自分事」としてとらえる事は簡単ではないが、実際に鉱山で働く現地の人の写真を目にするだけでも、見え方は変わる。これからはテラ・ルネッサンスの活動が持続可能な社会を作る「架け橋」となることを期待したい。

受益者のオーナーシップとリーダーシップは、支援の奥義だと言っても過言ではない。戦火や自然災害からの復興、村おこしや町づくり、ひいては国家経済の発展にさえも共通する奥義である。私事、格別信心深い人間ではないが、世銀で担当していた国々で、その奥義を極める現場に出会うと、観世音菩薩の姿が脳裏に浮かぶようになった。衆生の苦悩に感じて姿を変え、大慈悲を行ずると信じられる変化観音。そのお姿が、草の根の声を深く聴き、自助自立の道

へと手を差し伸べる謙虚な支援の在り方に、重なったのだろう。2年前、三陸沿岸の大被害を目のあたりにして絶望感に打ちのめされていた時、その観音さまに救われた。想像を絶する苦難を乗り越え、一針、一針、前進する大槌の刺し子さんたち。ここに寄り添うように働くテラ・ルネッサンスの職員たち。皆の明るい笑顔に「これこそ誠の人の助け」とほほ笑む観音さまが映った。官民共に復興に関わる全ての人々かくあれと、願ってやまない今日このごろである。



西水美恵子さん
元世界銀行副総裁

2013/3/17
毎日新聞
「時代の風」大槌の観音さまより抜粋

テラ・ルネッサンスは、国際協力第一線での活動と、当事者の声を国際社会に届ける情報発信を通じて、国際平和の確保に努めてこられました。まずはこの間の取り組みに、心からの敬意を表します。

特に、アフリカにおいては16年間にわたって、日本ではあまり知られていない、子ども兵、紛争下の性的暴力、などの紛争にまつわる社会課題に向き合ってこられてきました。この社会課題の解決に向き合うことは、平和で安全な日本に暮らす私には想像を絶する様々な困難と挑戦があられたのだと思います。

理事長・小川さんを始めとするテラ・ルネッサンスの皆さんの「すべての生命が安心して生活できる社会(世界平和)の実現」というビジョンの実現への思いとコミットメントが、この活動を前にすすめる最大の推進力に他ならないのでしよう。

国内外で多くの仲間がテラ・ルネッサンスに集い、支援が集まるのも、こうした職員の方々の情熱と強い思いがあつてこそだと思えます。また、彼(女)らの人と真摯に寄り添う姿勢が、刻一刻と変化する現地の人々の



野田智義さん
全人格リーダーシップ教育機関
アイ・エス・エル(ISL)創設者
大学院大学至善館 理事長・学長

ニーズにも、しなやかに応えることができる力を形作っているのでしょうか。

私は、リーダーシップの本質は、「いまだ見えない未来を見て、自分たちの内発的な思いに導かれながら歩みをすすめる」ことにあると信じています。その姿が周囲に共感と信頼の輪を広げ、社会を変えていくのだと思います。テラ・ルネッサンスの20年は、まさにリーダーシップの体現そのものです。

これからも、その本質を大切にされながら、人々に寄り添い、取り組みを積み重ねていけることを心から願っています。



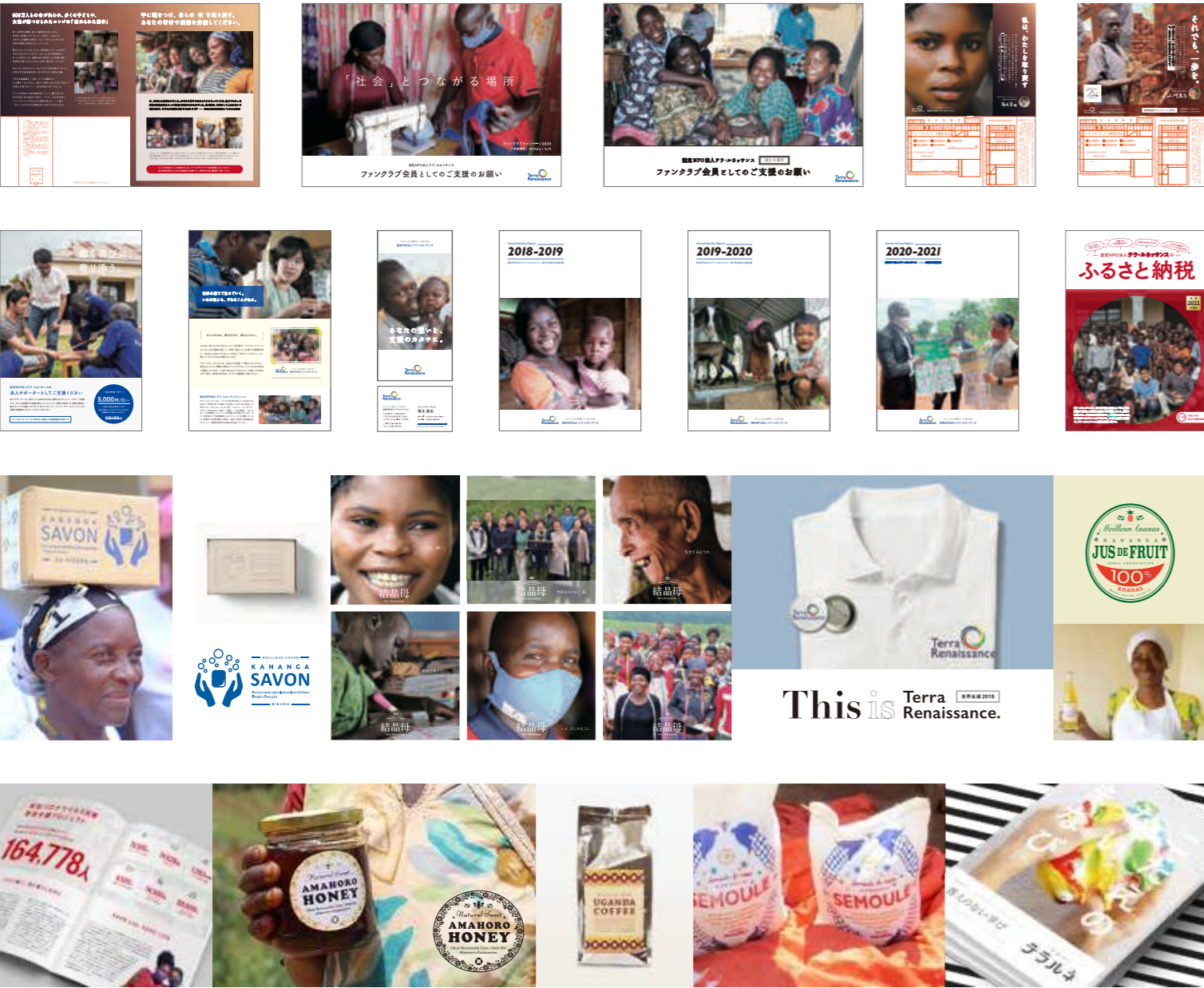
中山大亮さん
天理教真柱継承者
天理教青年会長

この度は、認定NPO法人テラ・ルネッサンスが創立20周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。創設者である鬼丸昌也さんとの出会いは、約2年前にさかのぼります。ある日、Facebookを通じてメッセージをいただいたのですが、どんな方か分からず返信できずにいたところ、今度はお手紙を送っていただきました。そこには世界平和に懸ける、強く熱い思いが綴られていました。

感激した私が「ぜひお会いしてお話を聞かせていただきたい」と申し出たことから、鬼丸さんとの交流が始まりました。以来、見識豊かで人脈も広い鬼丸さんとお会いするたび、いつも多くの刺激をいただいています。私は、貴法人のビジョンである「すべての生命が安心して生活できる社会(世界平和)の実現」という言葉が大好きです。

これからも、その精力的な取り組みに勇気をいただきながら、私自身も自分にできる救済活動に邁進していきたいと存じます。テラ・ルネッサンスの今後のますますのご発展をお祈り申し上げます。

平和のための世界観を描く



組織の本質をデザインする
 テラ・ルネッサンスの理念や価値観に基づいた活動を体現し、より多くの方々とともに世界平和の実現を目指すべく、2021年度より新たな部署として「ブランディングデザイン室」を設置しました。メディア・アプリケーションへの注力とともに、情報の整理によるコミュニケーションの円滑化を図ることで、テラ・ルネッサンスに対する共通イメージの形成を強化していきます。
 デザインとは、物事を理解しやすいように情報を整理することですが、わかりやすさを追求するあまり、本質の理解を妨げてしまうことが多々あります。近くで見ると雑然としているけれど、全体を眺めてみるとある種のルールや美しさがある曼荼羅(まんだら)のように、わかりやすさと曖昧さのバランスを取ることが、私たちが大切にしたいデザインのあり方です。
 世界のグローバル企業の多くが、各々の世界観を伝え、個人からの共感を集めることで、社会における大きな影響力を持つてきました。私たちも世界平和を目指すNGOとしてブランディングを強化し、その先で、一人ひとりの関心分野から社会に関わろうとする仲間を増やしていきたいと考えています。

平和のための仕組みをつくる

政策提言の活動年表

- 2003 国際小型武器行動ネットワーク(IANSA)加盟
日本小型武器行動ネットワーク(JANSA)設立
- 2004 コントロール・アームズ・キャンペーン日本設立

通常兵器移転の規制を求める100万人の顔署名運動
「ミリオンフェイスキャンペーン」実施
- 2006 ウガンダにて、ウガンダ小型武器行動ネットワーク(UANSA)と協力し
小型武器問題の啓発活動を開始

コンゴ民主共和国にて、
小型武器問題の啓発活動を実施

国連小型武器行動計画履行検討会議へ参加
- 2009 児童労働ネットワーク(CL-Net)加盟

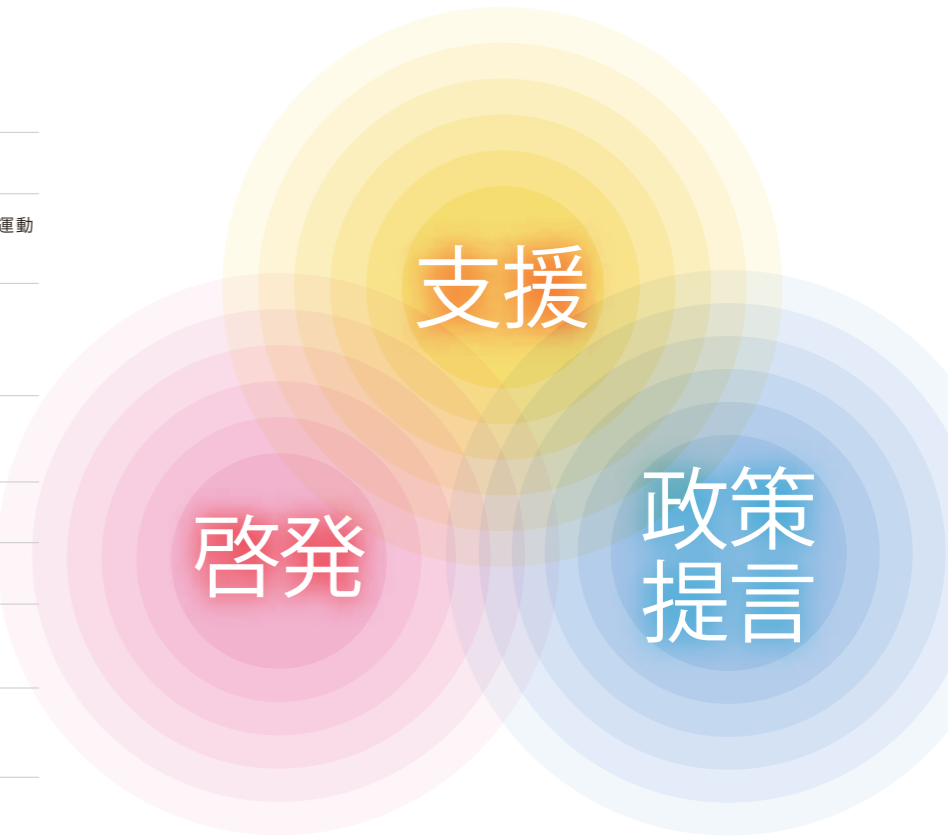
ウガンダにおける不法小型武器問題に関する
政府と市民社会の協力関係の強化活動を実施
- 2010 ラオスにて開催されたクラスター爆弾禁止条約
第1回締結会議へ参加
- 2012 武器貿易条約国連会議へ参加
- 2015 武器貿易条約(ATT) 第1回締約国会議へ参加
- 2016 武器貿易条約(ATT) 第2回締約国会議へ参加
- 2017 武器貿易条約(ATT) 第3回締約国会議へ参加
- 2018 コントロール・アームズ・キャンペーン日本解散

武器貿易条約(ATT) 第4回締約国会議へ参加
- 2019 武器貿易条約(ATT) 第5回締約国会議へ参加
「Terra Renaissance Sponsorship Program」を創設
「南」のNGO代表、研究者2名に
ATT第5回締約国会議参加のための渡航費を支援
- 2020 武器貿易条約(ATT) 第6回締約国会議へ参加

コンゴ民主共和国での支援活動を事例に論文を執筆
平和学会2020年度秋季研究大会にて発表

児童労働ネットワーク(CL-Net)運営委員就任
- 2021 政策提言推進室を設立
「子ども兵白書」の執筆を開始

武器貿易条約(ATT) 第7回締約国会議へ参加



社会課題を上流から解決する
 紛争の根本的な解決および予防を
 目指し、創立当初より「支援」「啓発」
 「政策提言」を三つの柱として活動
 してきました。20周年を迎え、新た
 に「政策提言推進室」を開設。私たち
 が取り組む課題に対して、国際的な
 枠組みの形成や政策策定というより
 上流部分への働きかけを強化し、世
 界平和への貢献に尽力します。
 紛争解決のためには、現場での支
 援だけではなく、その状況に影響を
 及ぼしている国際、地域、国家など、
 様々なレベルの課題に取り組む必要
 があります。特にアジアやアフリカ
 などの現場では、その必要性をより
 強く実感させられます。現在、政策
 提言推進室では児童労働の形態の中
 でも最悪といわれる子ども兵の課題
 を伝える『子ども兵白書』を執筆し
 ています。また、2020年から児
 童労働ネットワークの運営委員にも
 就任しました。
 今後、現場での事業を展開するに
 あたっては、「自立と自治」といった
 私たちが大切にしている活動のあり方
 政策提言の側面からも広げていく必
 要があると考えています。これまで
 の実績や知見を活かし、日本国内だ
 けではなく海外の市民社会や大学な
 どと協力して、共に本質的な課
 題解決に取り組んでいきます。

テラルネ用語集

アグロエコロジー

伝統知と科学知にもとづいた超学際的アプローチ。その目的は、生産性が高く、生物学的に多様で、かつレジリエントな小規模農業システムを設計・管理すること。アジア事業マネジャーの江角が、カンボジア事業でこの手法を取り入れ、実践と探求を繰り返している。

インターンシップ

テラルネッサンスにおいて「平和の担い手を育成する」という目的のもと「研修生」として位置づけられたスタップ。主に国内の啓発事業に従事し、ファンドレイジングをはじめ講演の運営補助や広報、支援者サービス対応など、その活動は多岐にわたる。人材育成の一環として取り組んでおり、2021年までに150名以上が修了した。近年では、関西だけでなく関東からのインターン参加の問い合わせが増えている。

ウェルビーイング

「well-being」とは、人間としての基本的ニーズが満たされているだけではなく、各々の社会や文化、価値観のなかで「生きがいのある暮らし」が実現できている状態。つまり、客観的な指標のみで測ることができない概念であり、本人の主観を含めて、身体的、精神的、社会的に満たされている状態かどうかが重視される。そのため、例えば、ある個人が身体的な健康水準を低下させても、他者を助けるという選択をするケースもあり得る。それにより人々が「生きがいのある暮らし」を感じていると思われる場面が、実際に、アフリカの現場で起きている。ウェルビーイングとは、このような選択をする主体者（エージェント）としての自由をも尊重した概念であるとテラルネッサンスでは捉えている。

ウガンダコーヒー

テラルネッサンスと10年以上のおつき合い（取引先）をいただく株式会社クリスタル様が製造する、自然栽培（無農薬・無化学肥料）のウガンダ産フェアトレードコーヒー。特



（啓発）

テラルネッサンスをより深く知るための資料集。活動20年を構成する膨大な資料群をコンパクトにまとめた内容となっています。テラルネファン（マニア？）の皆さまにオススメ。

微あるコーヒー豆は、同社の焙煎士である勝原正さんが「大量の農業と化学肥料に侵されていない本当に美味しいコーヒーをお客さまに提供したい」という想いのもと世界中を探して見つけた一品。しっかりとした味わいとともに、香りの高さ、飲み心地のよさから、たくさんの方々にご愛飲いただいている。

A T T

（政策提言）

国際的な武器の移転を規制する「武器貿易条約」の略称(ATT: Arms Trade Treaty)。本条約が国際移転の規制対象とする通常兵器とは、戦車やミサイルなどの他、一人でも運搬・使用ができる小型武器、複数人で運搬・使用ができる軽兵器などを指す。テラルネッサンスでは現場での支援活動だけではなく問題の根本的な解決を目指し、A T T締結国会議に参加するなどして政策提言活動に取り組んでいる。

オーダーメイド型支援

（支援）

テラルネッサンスが長年にわたって大切にしている支援の考え方。受益者一人ひとりの変化や成長、発展のプロセスは多様であることと前提に、それぞれ状況や環境を理解し、本人やその家族の望みや意向を可能な限り尊重しながら、一人ひとりに寄り添った支援の方法。効率性と冗長性のバランスをとりながらも、レジリエンス向上には不可欠な手法であると考えている。

オーナーシップ

（支援）

個人が当事者意識を持って向き合う姿勢のこと。テラルネッサンスの支援現場では、受益者が支援を与えられるだけではなく、自らに内在する力を発揮し、主体的に周囲の人々や地域と関わりながら、支援を活用していく姿勢を尊重している。

換金作物

（支援）

自家消費ではなく市場での販売を目的として生産する農作物のこと。主な例として、コーヒーやゴム、バナナなどがある。この内、カンボジアでは特にキヤッサバの栽培が盛んだが、栽培のために借金も借りたり、価格変動の大きさから安定した収入を得られないなどの理由から貧困に陥るケースが頻発。このことから、主な収入を換金作物だけに集中させるのではなく、家畜飼育や家庭菜園などバランスのとれた収入源を確保することによる生計向上支援に取り組んでいる。

自立支援と切り分けて行わずに、BHN支援(保護戦略)と自立支援(エンパワメント戦略)は、並行しながらハイブリッド的に実施し、最終的にレジリエンス向上に繋げることが念頭においている。

ファンドレイジング

（啓発）

NPO法人をはじめ公益的な活動に取り組む団体が、活動のための資金を、個人や法人、広くは政府などから集める行為の総称。また、資金だけでなく、活動に必要な物資や資材、従事する人員などを集めることなどから、本質的な意味として「仲間集め」と理解されている。

ファンクラブ会員

（啓発）

月々1,000円からテラルネッサンスを継続的に支援することができ、個人向けのマンスリーサポーター制度。大きな金額の寄付だけでなく、細くても長く支援を続けていただけで、中長期的な課題解決を実現することができる。

プリコラーージュ

（支援）

あり合わせの材料や道具を用いて、間に合わせの修繕を行ったり、足りないものや不便なものに対応、適応する営み。綿密な計画とエンジニア的思考に基づくやり方に比べると場当たり的に映るかもしれないが、その時、その場にある資源や在るものの潜在的有用性を考えながら、クリエイティブに創造していくプリコラーージュの営みは、紛争や災害など突発的なリスクや様々な困難に晒され、流動性が高い社会においては、レジリエンスを向上していく上で有用であると捉えている。



ふるさと納税(寄附)

（啓発）

生まれた故郷や応援したい自治体に寄附ができる制度。テラルネッサンスは、2017年より佐賀事務所を開設。佐賀県における国際理解、平和教育を展開するとともに、佐賀県が提供する「ふるさと納税(寄附)」を活用できるようになった。お返しの商品では、佐賀牛や佐賀県産のお米、海苔、酒、有田焼などがある。年を追うごとに認知度が高まり、ふるさと納税(寄附)の申し込みが増えている。

法人サポーター

（啓発）

月々5,000円からテラルネッサンスを継続的に支援することができ、法人向けのマンスリーサポーター制度。自社の所在地近辺にあるTSCにも加入することができ。

マラリア

（支援）

マラリア原虫をもった蚊(ハマダラカ属)に刺されることで感染する病

クラスター爆弾

（支援）

ひとつの親爆弾の中から、大量の子爆弾がばらまかれる方式の爆弾のこと。集束爆弾や親子爆弾とも呼ばれる。5%~30%が爆発しないまま残ってしまったため、空から「地雷」をばらまいているようなものといえる。戦闘が終わってからも、不発弾が被害を与え続けることから、クラスター爆弾は「第2の地雷」と呼ばれている。



結晶母

（啓発）

テラルネッサンスをご支援いただく皆さまにお届けするニュースレター。結晶母の周りで、同じような形をした元素が集まりひとつの大きな結晶をつくる。ひとつひとつの結晶は小さくても、結晶母を中心に集まった大きな結晶のつながりは、強くてたくましい。私たちの活動がそんな結晶母のような存在であれたらという願いを込めてニュースレター。の名称としている。

小型武器

（政策提言）

一人でも運搬・使用可能な武器。例えば、拳銃、自動小銃、短機関銃など。約100カ国で100以上の企業が小型武器を製造しているといわれている。現在、世界に10億丁以上の小型武器が存在するといわれており、これらの小型武器を使った暴力によって命を落とす人は毎年20万人以上にのぼるとみられている。

刺し子

（大植刺し子）

布地の上にひと針、ひと針、つづり縫いや刺し縫いすることで、布を丈夫にして、模様を描く、日本の伝統手芸。特に東北地方では、厳しい寒さをしのぐために布を重ねて保温する独自の技法が発達し、今でもその土地ならではの刺し子が残っている地域が多くある。

自尊心

（支援）

自分自身が価値ある存在であると感じている状態。テラルネッサンスでは、10項目(ローゼンバークの自尊心感情尺度)の設問により自尊心の程度を評価している。過去、10年以上にわたる元子ども兵の社会復帰支援事業評価から、自尊心の程度と生計向上の達成度には相関関係があることが明らかになっており、現在、自尊心を重要な評価指標の一つとしている。

自立と自治

（支援）

テラルネッサンスの考える自立とは、親族や友人、地域住民など、周囲の人々とのつながりの中で相互に支え合いながら、自らの力で生計を維持している状態。自治とは、自分の将来や、地域の課題、国の未来について主体的に取り組む「責任と権限」を持つことと定義している。個人、地域、国、それぞれのレベルにおいて周囲(他者、他地域、他国)との関係性を切り離さずに、自立と自治を促進することを重視している。

気。世界中の熱帯・亜熱帯地域で流行しており、特にアフリカ地域では、本来なら治療できる病気であるにも関わらず、医療体制が脆弱であることなどを理由に幼い子どもが感染し死亡する被害が相次いでいる。テラルネッサンス理事長の小川はこれまでに8回ほど感染した。

めぐるプロジェクト

（啓発）

テラルネッサンスにおける回収系支援事業の名称。現在までの取り扱いは、古紙などが古着・古本・アルミホイール、使用済み携帯電話・古紙などがある。現金の寄付に比べて取り組みやすいことから、学生から高齢の方まで幅広く人気がある。

子ども兵

（支援）

正規、非正規を問わず、あらゆる軍隊に所属する18歳未満の子どものこと。戦闘に直接関わること以外に、資材の運搬、食料の調達などの活動に従事する兵士(非戦闘員)も含まれる。子どもが兵士になる理由には、誘拐などによる強制的な徴兵や貧困などの理由による志願がある。また、少年だけでなく、少女も含まれる。少女の場合は、大人兵士との強制結婚や性的虐待を受け、望まない妊娠をさせられることもある。10歳にも満たない子どもが兵士にされることもあり、このような経験をした子ども兵らは身体的・精神的トラウマを抱え、また武装勢力から逃れたあとも偏見や差別を受けるなど、社会復帰が困難であることが多い。子ども兵は世界中で少なくとも25万人以上いるといわれている。



レアメタル

（啓発）

様々な理由から流通量・使用量が少なく希少な非鉄金属のこと。テレビをはじめ、スマホやパソコンなどの電化製品・精密機器に使用されている。天然資源の宝庫であるアフリカのコンゴ民主共和国ではタングスタルやコバルトの生産量が多く、これらが武装勢力によって違法採掘され、この取引が武装勢力の活動資金にあてられる。これらのことが、アフリカでの紛争悪化や児童労働の温床となっていることから「紛争鉱物」とも呼ばれている。

レジリエンス

（支援）

様々なリスクや困難に直面しながらも、自らに内在する多様な能力と周囲との関係性の中で、それを乗り越えていくしなやかな適応能力があるいはシステムのこと。それは特別な能力ではなく、人間に基本的に備わっている自然な適応システムであり、周囲の環境や社会システムとの相互作用により向上または低下するもの。外部から援助する側の役割は、レジリエンスの多様な発展プロセスを尊重し、対象とする国や地域、人々に内在する力が発揮できるように土壌環境を整えていくことだと考えている。



2017-2019 | ラオス
産学民連携による持続可能な森林保全
のための自然共生型産業の普及活動
ラオス不発弾汚染地域における
養蜂の技術向上と普及を目指した
“Farm miel”プロジェクト

不発弾汚染地域における森林保全や自然との共生を、養蜂などを通じて直接的な森林利用の代替となる自然資源を活用した産業の確立を目指したプロジェクト。



2015-2018 | ブルンジ
紛争被害者の能力開発を通じた
コミュニティレジリエンス向上プロジェクト

養蜂などを通じて紛争被害者が生計向上を果たすとともに、生産者協同組合の組織化とこれに伴うコミュニティの収入源が持続的に確保されることを目指した活動を行なった。



2005 | ウガンダ
スマイルハウス建設(元子ども兵社会
復帰施設住民参加型建設)プロジェクト

元子ども兵が洋裁技術を身につけ、収入向上活動を始めたいための社会復帰訓練施設の建設を実施した。



2003-2009 | カンボジア
女性義肢装具士育成と
義肢装具支援プロジェクト

経済的な事情から就学をあきらめざるをえない女性を対象に、奨学金の提供などを通じて義肢装具士の育成を行なった。当時、女性の義肢装具士は少なかった。

完了したプロジェクト



2018-2019 | コンゴ
紛争被害女性の
エンパワーメントプロジェクト

性暴力の被害にあった女性などを対象に、乳製品の販売促進による生計向上支援を実施。生産者協同組合の生産性の向上を目的に、組合の管理方法について研修を行なった。



2017-2019 | ウガンダ
元子ども兵社会復帰支援プロジェクトに
おける長期的インパクト評価事業

弊会の支援により自立を果たした元子ども兵が自立後の7年～9年の間に生計が向上・維持しているのかなど長期的な経済的、社会的なインパクトを質的・量的に調査し分析を行なった。



2007-2008 | コンゴ
コンゴ東部地域における元子ども兵及び紛争
被害者支援のためのパイロットプロジェクト

元子ども兵および性暴力被害を受けた女性などの紛争被害者が職業技術を身につけ、その技術により地元の病院へ木製ベッドを製作・提供するなどの社会貢献活動を促進した。



2007 | ウガンダ
元子ども兵が社会復帰するための
職業訓練センター建設プロジェクト

元子ども兵が服飾デザイン、木工大工の職業訓練に取り組みするための施設の建設をはじめ、施設敷地内のブロック塀の設置や、施設内の機材・備品を整備した。



2018-2021 | ウガンダ
難民居住区及びホストコミュニティにおける
自立支援プロジェクト

南スーダン難民を対象に、洋裁やレンガ積みなどの職業訓練を実施。仕事のために必要な知識や技術、資機材の提供により自立を目指した収入を得ることができるようになった。

※これらは、過去に完了したプロジェクトの一部を抜粋したものです。



2018-2021 | ブルンジ
農村部コミュニティにおける社会的弱者
(EVI)世帯の自立と自治支援プロジェクト

ストリートチルドレンなどを対象に、養豚やヘアドレッシングなどの収入向上支援を実施。また、地域社会における対人関係を向上するためのワークショップを行なった。




2010-2012 | カンボジア
地雷埋設地域クメール伝統音楽
復興&継承プロジェクト

ポル・ポト時代の長い内戦によって衰退した伝統音楽を復興し、演奏による収入を得られるようになるとともに、若い世代にも伝統楽器の演奏技術の継承が実施された。




2009-2019 | コンゴ
元子ども兵及び
紛争被害者エンパワーメントプロジェクト

紛争被害にあった貧困層住民などを対象に、緊急時の医療物資などの支援をはじめ、自給食料を生産するための農業支援や、カウンセリングによる心理社会支援などを実施した。



こうして僕は世界を変えるために一歩を踏み出した
 出版年 2008
 出版社 株式会社こう書房
 著者 鬼丸昌也



学生時代、たった一人でNGOを立ち上げた青年がいた。課題解決のためのメッセージは共感を呼び、日本中に広がっていく。情熱の社会起業家ストーリー。



ぼくは13歳 職業、兵士
 出版年 2005
 出版社 合同出版株式会社
 著者 小川真吾 / 鬼丸昌也

毎年50万人の命が小型武器により奪われる中、特に子ども兵の問題は深刻。絶望的な問題を知ったいま、私たちにできることを考える。

書籍


テラ・ルネッサンス I 一人ひとりに未来を創る力がある
テラ・ルネッサンス II マンガ 鬼丸昌也さんの挑戦
 出版年 2008,2009
 出版社 株式会社インフィニティ
 著者 田原 実

活動のきっかけ、仲間たちとの出会い、カンボジアからはじまった活動はアフリカのウガンダへと広がっていく。テラ・ルネッサンスの原点を漫画で！




250,000 チャイルドソルジャーが見た夢 (DVD)
 出版年 2012
 出版社 認定NPO法人テラ・ルネッサンス
 著者 認定NPO法人テラ・ルネッサンス

世界中で25万人以上存在するといわれる子ども兵の現状と、ウガンダにおける元子ども兵の社会復帰支援活動の様子を映像化。Youtubeでも無料公開中。




ぼくらのアフリカに戦争がなくなるのはなぜ?
 出版年 2012
 出版社 合同出版株式会社
 著者 小川真吾

アフリカにおける紛争の実情と、その背景にある複雑な社会構造を知ったとき、紛争は遠い国の出来事ではなくなるかもしれない。




クラスター爆弾、ラオスからのメッセージ
 出版年 2014
 出版社 認定NPO法人テラ・ルネッサンス
 著者 江角泰

ラオスに残存するクラスター爆弾によって、今なお多くの命が危機にさらされている。深刻な現状を一人でも多くの人に知ってもらうべく漫画化。




僕が学んだ ゼロから始める世界の変え方
 出版年 2014
 出版社 扶桑社
 著者 鬼丸昌也

講演を通じてたくさんの仲間を増やしてきたテラ・ルネッサンス。人の心に火をつけ、アクションを起こすための「伝える技術」を解き明かす。




平和をつくるを仕事にする
 出版年 2018
 出版社 筑摩書房
 著者 鬼丸昌也

厳しい現実や難しい課題を前に、「今の自分にできること」を積み重ねてきたテラ・ルネッサンスの創設者が語る「平和をつくる仕事」とは。



こうして僕は世界を変えるために一歩を踏み出した (DVD)
 出版年 2016
 出版社 認定NPO法人テラ・ルネッサンス
 著者 認定NPO法人テラ・ルネッサンス

年間150回以上にもおよぶテラ・ルネッサンスの講演は、多くの共感を呼びと支援を集めてきた。創設者・鬼丸昌也の講演を映像化。



「できないことを探すほうが難しい」と知って 子ども兵問題と向き合い、踏み出した僕らの一歩
 出版年 2020
 出版社 認定NPO法人テラ・ルネッサンス
 著者 認定NPO法人テラ・ルネッサンス / 栗田佳典 / 島彰宏

最新情報から子ども兵の問題を解説や、課題解決に取り組む人々へのインタビューを収録。中高生に向けた平和教育の学習教材として制作。

書籍ご購入の方はこちら



主なメディア掲載

- 2001 南日本新聞
「地雷撤去の現状を報告」
- 2002 読売新聞
「地雷畑で見た夢―地雷廃絶へ向けて講演会」
- 2003 毎日新聞
「小型武器の恐怖や少年兵問題を訴え」
- 2004 熊本日日新聞
「アフリカ少年兵悲惨な実態報告」
- 2005 京都新聞
「京のNPO法人が出版『ぼくは13歳 職業、兵士。』」
- 2006 京都新聞
「カンボジアの子へ文房具を」
- 2007 京都新聞
「元子ども兵の社会復帰支援に共感 売上げの一部をNPO法人に寄付」
- 2008 テレビ東京
「『知花くらの地球サポーター』」
- 2009 東京新聞
「京都のNPOに職業訓練施設」
- 2010 週刊金曜日
「企業や個人を巻き込む”闘わない”平和運動」

- 2011 NHK
「被災者が刺しゅう。ネットで販売」
- 2012 京都新聞
「京都のNPOや公益財団 資金集めに苦戦 寄付、震災支援に集中で」
- 2013 京都新聞
「下京のNPOに『地球市民賞』」
- 2014 京都新聞
「ラオスの現状漫画冊子に」
- 2015 NHK
「NHKスペシャル 戦後70年ニッポンの肖像」
- 2016 毎日新聞
「世界の課題 清水寺から考えよう」
- 2017 ABC朝日放送
「世界の村で発見！
こんなところに日本人(ウガンダ)」
- 2018 NHK
「明日世界が終わるとしても」
- 2019 佐賀経済新聞
「佐賀のNPOが佐賀豪雨災害チャリティ―講演会 応援メッセージ届ける」
- 2020 NHK
「『おはよう日本』アフリカの感染拡大を防げ！ 奮闘する日本人」
- 2021 毎日新聞
「アフリカ支援の京都のNPO 台湾での活動に乗り出したわけ」

表彰

- 2009 一般社団法人倫理研究所地球倫理推進賞
- 2012 独立行政法人国際交流基金地球市民賞
- 2014 公益財団法人京都オムロン地域協力基金 ヒューマンかざぐるま賞
- 2014 自由都市・堺平和貢献賞
- 2015 公益財団法人社会貢献支援財団社会貢献者表彰
- 2017 第2回「これからの100年を紡ぐ企業認定」の認定企業
- 2017 認定NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC) NGO組織力強化大賞 担い手育成部門賞
- 2018 一般社団法人企業価値協会「企業価値認定」の認定団体
- 2020 第4回ジャパンSDGsアワード SDGs推進副本部長(外務大臣)賞
- 2021 一般社団法人ソーシャル企業認証機構 「ソーシャル企業認証制度 S 認証」の認証団体

微力だけど、無力じゃない



吉田真衣 理事・大塚利子事業部長・政策提言推進室長

自分の夢を叶え、原点に戻り、そしてまた挑戦できる場所。

高木瑞希 啓発事業部 インターン

平和への願いと共に、未来に無限の可能性を見いだせる場所。

藤森みな美 啓発事業部 寄付・法人連携 担当

それぞれが願う多様な「平和」を、認め合いながら一緒に作り上げることができる場所。

島彰宏 啓発事業部 オンラインマーケティング 担当

平和への想いを「自信」に変える場所。

古岡蘭 アフリカ事業 サブマネージャー

多くの可能性を生み出し、関わる人の一歩を後押ししてくれるところ。

栗田佳典 啓発事業部 講演企画・支援連携 担当

それぞれが持つ平和の種が自然と芽吹く、あたたかく優しい土壌。

江角泰 理事・カンボジア事務所長・アジア事業マネージャー

宇宙との調和をはかるアメーバ。

小川真吾 理事長・海外事業部長

共通の未来に向かって、一人ひとりが多様な生き方をできる場。

平和を体現できる場所

テラ・ルネッサンス

鎌田久美子 ブランディングデザイン室 スタッフ

豊かな暮らしとは、豊かな心でいるとはどういうことか、自分に、世界に、問い続けられる場所。

鬼丸昌也 創設者・理事・事務局長

「わたし」に、平和をつくる可能性(ちから)があると信じさせてくれるところ。

西川智子 管理部

多様性を受け入れ、互いの個性を尊重しあえる仲間と平和を体現する場所。

佐々木純徹 啓発事業部 佐賀事業・政策提言推進室 担当

世界平和の実現に本気で挑む集団。ただし、やり方は、みんなが幸せになるように、純粋に徹する心で。

香葉村萌 啓発事業部 海外ファンドレイジング 台湾 担当

ひとりひとりの「give」が集まり次の「give」へつなげる場所。

飯村浩 アジア事業 サブマネージャー

心が折れそうになったとき、再び前に進む力をくれる場所。

上野知子 啓発事業部 支援者サービス 担当

『三方よし』近江商人のように支援者さまよし、スタッフよし、世界によしをこれからも。

より良い世界を築く礎

黒澤かおり 大塚利子 会計担当

視野を広く持ち、たくさんの学びを得られるところ。

小川さくら 啓発事業部 インターン

一人でも多くの人の世界をより良くしたい、と思える勇気をくれる場所。

鈴木達二郎 アフリカ事業 マネージャー

社会変革のための結晶母(結晶核)。

私にとっての

川島綾香 プルンジ事務所長

私にもみんなにも力があって、生きるって素晴らしいって思わせてくれる安心できるコミュニティ。

今津千尋 啓発事業部 インターン

一人一人が平和をつくる主体であることを、教えてくれた場所。

佐々木加奈子 大塚利子 生産管理 担当

新しい人との関わりや新しいことを学べる、自分にとってプラスがふえる場所。

中林若菜 ブランディングデザイン室 デザイナー

人々に気づきを与え原点に立ち返らせる不思議な組織。

蒲田琴梨 啓発事業部 インターン

世界平和の実現に繋がるステップを一つ一つ学べる場所。

津田理沙 啓発事業部スタッフ 寄付・法人連携 担当

平和を願う、素直なところに立ち返らせてくれる場所と仲間。

野田怜弥 啓発事業部 インターン

受益者と、スタッフと、支援者さん、みんな家族で、みんな支えあってる。

田代啓 啓発事業部 インターン

「きれいごと」と現実をつなげる、温かくて大きなかたまり。

田畑勇樹 啓発事業部 インターン

平和について学び、平和を実践する場所。

元浦菜摘 海外事業部 インターン

平和の儚さと尊さに気づき、人が人を想うあたたかさに触れられるところ。

高口望 啓発事業部 インターン

平和とは何か、理想と現実にかついで考えた場所。

ひとり一人に未来を造る事ができるー。

僕は高校三年生の時に、スリランカで出逢った

アリヤラド博士に教えて頂きました。

以来、ずっとこの言葉を信じています。

だって、僕がテラ・リネッサエでつくって

活動して来た20年で出逢ったすべての人が

この言葉が正しいことを証明してくたから。

だから、この世から、ひとり一人に未来を

つくることができると信じて、その力が輝き出す

ため、支援を続けていきます。ちゃんと、それが

世界平和を實現する確実な道だから。

僕にそのお力にこそある。未来を造るから、

信じて、この世から一緒に

鬼丸

認定NPO法人テラ・ルネッサンス

〒600-8191 京都府京都市下京区五条高倉角堺町 jimukinoueda bldg. 403号室

TEL:075-741-8786 FAX:075-741-7965 MAIL:contact@terra-r.jp

Facebook:terra.ngo Twitter:@terra_ngo instagram:terra_ngo

●本書の一部または全てを複写・転載引用する際には、予めテラ・ルネッサンス事務局までご連絡ください。



ひとり一人に未来をつくる力がある

認定NPO法人 テラ・ルネッサンス